

赤い回転灯がめまぐるしく周囲を照らす中で、遽しくうごめくたくさんの人影があった。本来なら静寂に包まれているはずの山奥の県道が真っ赤な光に覆われている。

たくさんの緊急車両がずらっと並ぶその先には、山の斜面に激突して大破した軽自動車。

「ガソリン、抜き取り完了！」

「オイル類の洗浄完了!!」

「よし、ボンネットのヒンジを切断するぞ！ おまえは反対側のフェンダーを切断してくれ!!」

「了解！」

レスキュー隊員たちの怒号が飛び交い、同時にパワーカッターのけたたましい音が鳴り響く。

「旦那さん、もう少しの辛抱ですから頑張ってください！」

「奥さんも、意識をしっかりと持って!!」

救急隊員が一生懸命、前席にいる男女に話しかけている。

二人はダッシュボードとシートに完全に挟まれており、恐らく下半身は原形をとどめていないと思われる。あまりの惨状に、駆けつけた警察官もレスキュー隊員も、そして救急隊員も……全員が車の解体に躍起になっていた。

だが、助手席の女性を励ますために声をかけていた救急隊員が、目を疑った。

「あ………！」

救急車の中にいたはずの少女が、いつのまにかガードレールに向かってふらふらと歩いているのが視界の隅に映ったのだ。

「娘さん！」

気づいた救急隊員が持っていた消化器を投げ出して少女に駆け寄ったが……空しくも間に合わなかった。彼の腕は、宙を掻くだけ。少女の身体は暗く閉ざされた崖の底へと消えていった。

あ
さ
く
さ
ば
し
は
ら
え
か
が
み
浅草橋袂鑑
拾
四

一、ファーストコンタクト

山梨県某所――

山がいくつも連なる山奥、その山々の中をうねるように伸びる県道に、巫女姿のちあらは降り立った。浅草橋の神社を出てからかれこれ四時間以上、電車で揺られ二時間、車に揺られ二時間の旅であった。

疲れはしたが周囲を見渡しても山しかないこの景色は、ちあらにとっては新鮮だった。なによりも空気がおいしい。そしてちらほらと見える紅葉がなかなかイイ。

ちあらのおそばには作業着を着た二人の山梨県職員、路肩には山梨県土整備部けんどせいびぶのシルバーのトヨタプロボックスがハザードを出して駐とまっている。

降り立った県道というのは急カーブの入り口あたりで、Rのきついカーブがぐっと左の方へと曲がって行くのが見える。ちあらと県職員はそのままカーブの先端へと歩いて行き、カーブ全体が左右に見渡せる場所で振り返った。見上げると、右手から左手に向かって急勾配になっているカーブであることがよくわかる。

後ろ側はガードレールをはさんで崖だ。

「ふむー」

ちあらはガードレールから上半身を乗り出すと崖下を覗きこみながら、何度か頷いた。

「どうですか？何か感じるもんなんですか？」

県職員の一人在少し自信がなさそうな、元氣のない声でちあらに尋ねた。

もう一人はキョロキョロと周囲を見渡す。

『感じるも何も……バツチリ見えてるけど……』

ちあらはそう思いながらも、そのことは声に出さないでおいた。霊が見えるなどと言うと、昨今は頭がおかしいか詐欺師扱いされることが多いからだ。

もちろん目の前の二人は、ちあらのそういった能力を期待して山梨の山奥くんだりまで連れてきたわけなのだが……そうであったとしても「今日の前に霊がいる」とは言いづらかったのだ。

「霊や祟を信じる方ではないんですが、何度工事してもこのカーブの事故だけは減らないんです」

県職員の一人は付け替えたばかりのピカピカのガードレールとカーブミラーを指さしてそういった。少し遠くを見上げると、対向車の有無を知らせる電光掲示板も設置されている。

道幅も片側一車線ではあるが、特に狭いということもなく、十分な広さが確保されていた。山の中の県道としては十二分に立派な道路だ。

しかしこのカーブに渦巻く霊——いわゆる地縛霊——は結構な数であった。二〇以上はいようか？そいつらが県職員の体にまとわりついたり、ガードレールやカーブミラーからこちらをじっと見つめているのがちあらには見えるのである。

まさにこのカーブは地縛霊がひしめき合っているといっても過言ではなく、それは即ちここで多くの命が失われたことの証拠でもあった。この道路が作られてから何十年経っているのか解らないが、その分が貯まりに貯まっているのだろう。

とはいえ地縛霊の力というのはそんなに強いものではないことをちあらはよく知っていた。普通の人間ならば、どうということはない。しかし精神が病んでいる時、体が弱っている時、睡魔に襲われている時など、ふとした隙に霊は入り込む。

たとえそれがほんの一瞬だったとしても、車を運転していた場合、命取りになることもある。

「呼ばれたからには、仕事はする」

霊の有無に明確に答えることを避けたちあらは、懐から払い串を取り出すと深くうなづいた。

「すぐ済むから、待ってて」

そしてそういって、今度は丁寧ていねいに折たたまれた奉書紙ほうしょしを取り出すと、その端はしを持ってバンツと広げ、祝詞のりことを読み上げ始めた。

なるほど、傍はたから見ているとそれっぽい。

「……祓閉比清米給閉登、白須事乎聞食世登、恐美恐美母白須！」

職員の二人にはちあらが何を喋っているのかは解らなかつた。ただ驚くべきことは、ちあらが払い串を振りながら祝詞をあげている間、和紙でできた奉書紙が祝詞が書かれた面をちあらに向けて空中ととに留とどまっていることだった。

そして祝詞を捧げ終わつたあと、ちあらは一步力強く右足を踏み出すと、まるで刀を薙ぎ払うように払い串を懐から外側に向かつて振り上げた。

すると宙に固定されていた奉書紙が真つ二つに切れたかと思うと、一気に燃え上がった。

その炎の中に地縛霊が吸い込まれ、焼かれていく。

しかも全ての地縛霊が焼き尽くされるまで、その炎が絶えることはなかった。

「うむ」

とはいえ、それは数分の出来事である。

「終わった」

ちあらは燃え尽きて風に乗って飛んでいく灰を前に、コクリとうなづいた。残つた灰が空高くへと舞い上がり、やがて風景の中に消えていく。

「これでもし、事故が減つたなら、霊の仕業」

そしてちあらは祓い串を懐へしまった。

「意外とあつけないもんなんですね」

いまいち状況を理解出来ない県職員は、代わり映えない景色を見つめてそうつぶやいた。

なんとこのだろう、地鎮祭の時のような長つたらしい儀式めいたものがなかったからかもしれない。ただ、科学的には考えられない不思議な現象は目の当たりにすることができた。奉書紙が空中にしかも風にもあおられず浮いていたこと、その紙がすぐに燃え尽きなかったことである。

実はこういったオカルト案件に自治体や行政がからむことは基本的になかった。しかし月夜野つきよのちあらという存在が、警視庁の災害対策課や東京都の災害対策本部などに派遣されるようになる、行政の対応は一変、東京都の災害対策費を大幅に引き下げるといふ効果をもたらした。

というのも行方不明者の捜索や災害発生時の状況把握に警察やボランティアなどの人海戦術に頼るよりも、ちあら一人を派遣するだけで済むようになったからだ。

一日で何十万〜何百万円とかかっていた行方不明者の捜索などが、ちあら一人の人件費でまかなえてしまえばかりか、精度が段違いに高いのだ。

東京都のそのやり方が徐々に他の地方自治体に知られるようになり、何か災害が起きると近隣の県は東京都に依頼するようになった。

ちあらがこうして山梨県の山奥にまで連れてこられたのも、そういった経緯によるのだった。

またこの自治体の対応はちあら自身にもメリットがあった。なにせ何十人、何百人の役目を一人でこなすのだ。いただくお給金も決して安くはなく……もっともそれらはちあらの懐にではなく、ちあらの上司であるところの黒翼くろつばの懐に入るのではあるが……。

「とりあえず、これで様子を見る感じですか」

「そう、だけど……たぶん事故は減らないと思う」

安心しかかった職員たちの前で首を左右に振った。

「え？」

職員二人が顔を見合わせる。

ちあらは黙って崖の方を振り返ると、腕を上げてとある地点を指さした。山々が連なるその先に一つの岩山が顔を覗かせている。

「あー、えーとあれは……雄鷄山おとりやまだったかな？」

「いや、大師山たいしやまじゃなかったっけ？」

「ちよっと地図で確かめる……」

職員の一人在ハンディサイズの登山地図を取り出してパラパラとページをめくる。

「雄鷄山でしたね」

そしてちあらともう一人の職員に地図上の雄鷄山の地点を指さした。

「で、その雄鷄山が何か？」

「さっきからあの山から視線のようなものを感じている」

ちあらはここで初めて、「霊が見える」的な言葉を吐露した。

さらにちあらはその力が非常に強力であることも知覚していた。というのもちあらが感知できる殺気や負の感情というのはせいぜい数十m。こんな何kmも離れた負の気を感じることは不可能だからだ。

にもか関わらずこれほど圧を感じるということは、相当強力な負の力が働いているに違いない。

「力の正体は解らないけれど……ここで事故が起きるのも、地縛霊が滞留するのも、あの山の所為だと思ふ。あの山からの力が衰えない限り……ここはまた事故が起きる」

ちあらはそう断言した。

「ええ……」

ここで県職員は二つの思いが生じた。

一つはちあらはの言葉をそのまま信じる思いだ。先ほどの儀式を見せられると、この目の前にいる小さな巫女には何か不思議な力があってもおかしくはないかも、という気持ちがある。

もう一つはエセ霊能者よろしく、さらに理由をつけて仕事を増やそうとしているのではないか——つまり県から余計にお金を引き出そうとしているのではないか——という思いだ。

「だから、事故が減らないようだったら、もう一度わたしを呼んでほしい」

ちあらは職員たちの心の中を見透かしたのか解らないが、それ以上のことは要求しなかった。

「一応、雄鷄山のことは持ち帰って議題には挙げましょう」

「そうだな」

二人はわりと真剣にちあらはの話を受け入れたようだ。持っていたタブレット端末にメモをしている。

そこには日報か何かのためか、現場写真なども収められていた。もちろんちあらはが祝詞を唱えているところも。

「そーいやあ、雄鷄山の登山道入り口は帰りに通ることができないんじゃないか？」

職員の一人がもう一人に思い出したように尋ねた。

「ああ、まあ行けなくもないが……行きますす？」

話を向けられた職員が今度はちあらに尋ねる。

「……」

確かに興味はある。が、力の正体を突き止められるかどうかは自信がなかった。

「ただ、登山道の入り口と言っても雄鶏山はいくつかの尾根を越えないと行けないですよ。雄鶏山専用の登山口っていうわけじゃないんです」

「布施さん、詳しいね」

「一応登山が趣味で……」

「へー、それは知らなかった、だから登山地図なんて持ってたのか」

「山に直接つながっていないなら、行っても何も解らないかも……」

ちあらは少し自信なさげに答えた。

「そういうものなんですネ」

「コクリ」

「とりあえず戻りましょうか」

三人はハザードを出して止まっている車に戻った。

前席に県職員が、助手席の後ろにちあらといった具合だ。プロボックスという車は四ナンバー登録のため荷室を室内長の半分はとらなければならない。従って、後部座席の膝空間は決して広くはないのだが、身長一四〇cmしかないちあらには十分な広さだった。

後ろの荷室には測量やらで使う機材が載せっぱなしになっているので、カーブや道路の凹凸を通るたびにガタガタとうるさかった。

数km降りてくると通行止めゲートが見えてくる。実はこの道路は冬季通行止めになっており、今の時期、一般車は入って来られない。県もこの道路が閉鎖されるタイミングを見計らって、ちあらに依頼したので。

そのゲートのすぐ脇に、細い道路があるのが見えた。今走っている道路とは打って変わって狭く、アスファルトもだいたい痛んでいる。

「こっちの旧道を行けば雄鶏山につながる登山道入り口の前を通って帰れます。この道はまた県道と合流するんで、ついでだから見ていきましょう」

職員はハンドルを切ると、旧道の中に入っていった。雄鶏山のこと気がなっているのだ。

旧道はさきほどの県道に増してカーブが厳しかった。しかもガードレールなどもなく、ハンドル操作を誤れば谷底に真っ逆さまだ。

十数分も走るとシルバーのプロボックスがまた路肩に寄せ、停まった。

両側に木々が迫り、目の前には沢にかかる小さな橋が見える。すれ違うのも厳しいくらい狭い橋だ。

そして車が停まった路肩はただの路肩ではなく、四々五台は車が駐められる広さがあった。登山者用に用意されたちよつとした駐車場のようだ。

「ほら、そこが登山道の入り口ですよ」

職員が後部座席のちあらに話しかけると、窓の外を指さした。

なるほどその先にはうっそうとした木々の間にぽっかりと開いた登山道の入り口が見えた。まるでトネルの入り口のようなのだ。まだ昼間だというのに、ずいぶんと暗い。

「見てくる」

ちあらは車から降りるとその登山道の入口まで歩いた。

木々はちあらに対して拒む様子はなかったが、登ることは勧めていないようだった。

ちあらは右手を掲げて何羽かの鳥も呼び寄せてみる。鳥たちもこの登山道の先を恐れたり嫌ったりしているワケではなかった。

木々に閉ざされた山の中で鳥たちと会話する巫女の姿は神秘的でもあり、また美しくもあつた。まるで山の守り神のようだ。

「森に巫女つてのは絵になるもんだな」

車の中からその様子を見ていた県職員がそんなことをつぶやく。

「なんだか不思議な光景ですね」

もう一人も頷く。

鳥たちとのコミュニケーションが終わって、ちあらは小さなため息をついた。これといった有用な情報を得られなかったのだ。これ以上の情報を得るにはこの土地の神と接触すればよいのだが……神との接触はデリケートすぎることをちあらはよく解っていた。この土地の神のことをよく調べてから接触し

ないと、機嫌を損ねたら目も当てられない。下手に天変地異を起こされても困るし。かといって神によつては挨拶もせずに入ってくるとは何事かと怒るヤツもいる。

なのでこれ以上の調査をするにはこの付近にある神社を把握しておく必要があるだろう。ちあらは車まで戻ると「やはりよくわからなかった」とだけ報告した。

* * *

山梨県から再度ちあらの元に連絡が入ったのは、一週間ほど経ってからのことだった。あの雄鶏山について調査依頼が来たのだ。

正直ちあらは驚いた。てっきりあの件は新たな事故が起きるまで関わることはないだろうと思っていたからだ。にもかかわらず、山梨県は雄鶏山調査を依頼してきた。

ただ、山梨県がこの山に固執する心当たりもあつた。

あのカーブはちあらが除霊をする一ヶ月ほど前、悲惨な事故があつたからだ。軽自動車の単独事故だつたのだが、消防隊員が前席にいた男女を救出している間に、先以後席から助け出された少女がガードレールを乗り越えて崖から飛び降りたのだ。

恐らく前席にいた両親が助からないと思い、悲観して自殺を選んだのだと報じられ、世間は少女を放置した県警や消防を非難し、知事が謝罪会見、山梨県警の署長が更迭されるまでの大騒ぎとなつた。

県としてはどんな小さな原因でも潰しておきたいと考えたのだろう。

が……。

「困った」

事は割と大変である。

そもそも山登りしたくないし。

あの山やその周囲にいる神々の許可を取るのも大変。

もっともちあらの力というのはとてつもなく強大で、そんじよそこらの土地神など恐るるに足らないのだが、ちあらが力でねじ伏せたとしても、ちあらが去ったあと逆恨みして、その土地に不幸を振り撒いたり近づいた人間を呪い殺したりされたのでは本末転倒だ。神々の世界にもコンセンサスというものが必要なのである。

こういう時に役に立つのが、ちあらの持つ様々な秘術や力……ではなく、インターネットであった。

まずはグーグルマップであの雄鶏山の付近を表示し、「寺社」で検索。さらに日本全国の神社や寺を網羅したサイトから、あの山の付近の寺社を検索。

小さな祠も含めて一五カ所をリストアップした。

ちあらはこのリストを山梨県に送るとともに、あの山の半径一〇km以内にリストから漏れた寺社がなにか確認するよう伝えた。ちなみにこの一〇kmというのはテキストである。ただちあらの術の影響範囲を簡単に見積もった広さだ。

そして一日では終わらないこと、さらにふっかけた金額の見積もりを黒翼を通して東京都に伝えた。
「ふう」

そこでようやく一息つく。

いつの間にかちゃぶ台の上にあったお茶は冷めていた。

入れ直そうと立ち上がる。

そういえばそろそろコタツを出さないとーなどと思いながら……。

二、小競り合い

さらに一週間後、ちあらは再び山梨県にいた。ふっかけた見積もりはなんの文句も出さず通ってしまったのだ。しかも一週間で稟議が降りるとは役所では異例の早さだ。

塩山駅、午前七時半。

朝五時の電車に乗ってやってきた。

あの雄鶏山はこの塩山から行くのが近いのだ。

とはいうものの、登山道入り口まではここから二〇kmはある。それに今日は雄鶏山に行くのが目的ではない。雄鶏山周辺の神社や寺を巡って土地神の許可を得るために向いたのだ。その数二一社。山梨県からのリストも合わせると、六社も増えてしまった。

初めて降りる塩山駅はちあらの他に降りる客も多く、改札前は結構な人でごった返していた。田舎の駅な上に早朝なのだから人はいないだろうと予想していたので、少し面食らった。

駅にはみどりの窓口もあり、それなりに乗降客が多い駅のようだ。

乗客たちはみな登山者っぽい格好をしていて、大きなリュックを背負っている人がほとんどだった。一方のちあらは蓬萊不忍学園の制服に、背負えるタイプの学生鞆、肩から下げるタイプの筒状の図面ケ

ースという出で立ちだ。鞆には早起きして作ったお弁当と飲み物が、そして図面ケースには打刀うちがたな（日本刀）が一振り入っている。

地元では見たこともない制服を着ているちあらは、少しだけ駆で注目を浴あびたかもしれない。ただ人の流れは確実に南口に向いており、北口に向かったのはちあらだけだった。

北側はそんなに寂さびれているのかと思いつながら階段を降りて出してみると、ロータリーもあり小綺麗に整備されていた。

タクシー乗り場にはタクシーが数台、ということは北口もそれなりに人は降りるようだ

ちあらが先頭の一台に近づくと、運転士が後部座席のドアを開けてくれた……のを無視してそのまま運転席側のドアに行く。運転士が少し訝いぶかしげながらも窓を開けた。

「一日貸し切りたい」

「観光かい？」

運転士はまじまじとちあらを見つめた。おそらくどうという客なのかを見極めたかったのだろう。何せ明らかに登山者には見えないし、地元の制服でもないし、塩山は修学旅行生がくるような場所ではない。「パワースポットめぐり。今日中に二十一カ所も回らないといけない」

ちあらは鞆からタブレット端末をとりだすと、その画面を運転士に見せた。タブレットに表示されたマップにはずらっと寺社仏閣の位置がポイントされている。

「こりや大変だよ、嬢ちゃん」

運転士が目を見開く。

「すべて行ける保証はできんよ？」

「行けるだけ行く。お金はちゃんとする」

そういつて今度はお金の入った封筒を靴から出して手渡した。

「そんなにはかからないよ。ウチは二時間で一二〇〇〇円だよ」

「終電の時間までお願いする」

「本気だね、嬢ちゃん」

「コク」

ちあらはうなずくと、タクシーに乗り込んだ。

するりと滑らかにタクシーが発進する。

さて、まずは最初にどこに行くべきか。

実は神社というものは人間の都合で建てられている。何故なら、奉られているのは神だが、拝みに行くのは人間だからだ。修行の場でもない限りだいたいは誰でも行ける場所にあるものだ。

だから二一カ所回ると言っても、ほとんどが集落の道沿いに集中している。

なので効率よく回りたいところではあるのだが……。

「最初はどこに行けばいいかね、嬢ちゃん？」

運転士はとりあえず車を北に向けながらも、バックミラー越しにちあらに視線を送った。

嬢ちゃん呼ばわりはちよつと……とちあらは思ったが、当人に悪気はないし、育った時代が自分とは違うのだろうと思ひ、そのまま褒め言葉として受け取つた。

「お伊勢いせの宮というところ」

ちあらはまずは伊勢という名前が付いているところに行くことにした。

というのも伊勢・出雲いずも・諏訪すわあたりの名前が付いている神社があつたらまずそれらを参らないといけないからだ。鹿嶋かしま、八幡はちまんあたりも要注意だ。これらに詣でる前に他の神社に行くのものなら、あとで何を言われるか解らない。とはいえこういつた全国規模の神社はそこに神様が居るわけではないので、ご利益に預かれないのが曲者だ。

さらに地元の間人が勝手に奉つた場合もある——というか、それがほとんどだったりする——ので別に行かなくても良かったみたいなきも……。

「うーむー」

ちあらはタブレットとにらめっこしながら、先に行くべき神社が他にないかを確認した。

「回る順番つてのは決まってるのかい？」

「最初のいくつかは決まってる。あとは効率重視」

「はいよ」

タクシーは緩やかな上り坂をけっこうなスピードで登っていった。

* * *

一二時、お昼休憩も兼ねて、運転士は道の駅へとちあらを連れてきてくれた。

この時点で回った神社は九社。まずまずのペースではなからうか。

そして手応えは皆無だった。どの神社も祭神がいまいか、雄鶏山とは全く関係のない神ばかりだった。まあ、ある程度予想したことではあったが……徒労感は否めない。あと山だからということもあるのだが、動物神が多すぎるのも問題だった。神とはいえ言葉が通じないのだ。どうしても感情のやりとりになってしまう。

この先も思いやられる。

「なんだ、嬢ちゃんは弁当持参か」

いそいそと弁当箱を取り出してているちあらに、運転士が目丸くした。

「早起きして作った!」

ちあらは誇らしげに弁当箱を掲げた。宝箱ゲットか？

「お、自炊するのかい、えらいねえ」

お弁当の中身はオーソドックスというか、コンサバティブというか、ご飯の部分は日の丸、おかずはほうれん草のごま和えとひじきの煮付けに、だし巻き卵とタコさんウィンナーといったところだ。

おかずの種類が多いが、何のことはない。大量に作って冷凍してあるだけなのだ。その日の気分に

よって食べたいものを解凍して弁当箱に詰めているだけなのだ。

ちあらの通う蓬莱不忍学園は給食がないので、生徒は弁当を持参するか購買部で調達することになる。なのでほぼ毎日弁当は持って行っているのであるが、毎朝つくるのは面倒なので、こうして様々なおかずを作りためているに過ぎなかった。

飲み物もただお茶のペットボトルを二本ほど鞆に入れてあるだけである。

天気は良く、パラソルのついたテーブルでお弁当を食べるのは、なかなか遠足気分が楽しい。

せっかく来たのだから、後でお土産とかを覗いてみようかと思う。賽の目クラブのみんなに何か買っていないか。

そう思いながら道の駅の建物に目を向けるとほうとうの幟のぼりが見える。山梨といえはほうとう。食べたことないなーなんてことも思う。

「ありや、まだ食べてるのか」

などと遠足気分を満喫していると、もう運転手が戻ってきた。

はや。

さすがタクシーの運転手。商売柄、食事を取る時間も惜しいのだろう。

「も、もうちょっと待って……」

「いいいいいよ、嬢ちゃんのペースで食べてくれ」

「お、お土産も見たい」

「あー、道の駅は夕方には閉まっちゃうから、見れるときに見とくとイイかもな」

「ありがとう……」

「じゃ、用事が済んだら車に戻ってきてくれ」

運転手はそう言うのと、車に戻っていった。

あまり待たせるのは悪いと思ひ、精一杯の速さで弁当を食べ終わると、いそいそと売店へ。

いや、その前におトイレ。

今度はソフトクリームの幟に目を奪われる。

そういえばほうとうも気になる。

などとソワソワしながらちあらは道の駅を堪能した。

お土産はほうとうセット。いつも食うのに困っている十和子の分も買っておいた。あとはお野菜とか安かったけど……持って帰るのが大変なので断念した。

季節によってはブドウや桃も扱っているらしかった。

タクシーに戻る前にソフトクリームも買う。あと運転士さんに缶コーヒーも。

「戻った」

「嬢ちゃん、気が利くね」

ちあらから缶コーヒーを受け取りながら、運転手が嬉しそうに笑う。

「次は大轟山三津窪神社だ。ここからそんなにはかからないよ」

「コク」

ドアが閉まると、タクシーはすぐに動き出した。

「三津窪神社は今日の、本命」

ちあらは氣を引き締める。が、その真剣な表情とは裏腹に、右手に握られたソフトクリームのせいで
 雰囲気は台無しである。

三津窪神社はあの雄鷄山につながる登山道と同じ旧道沿いにある神社で、奥の院が雄鷄山に隣接する
 山の頂にある。

そのことからちあらはこの神社が雄鷄山と関係があるのではないかと踏んでいた。祭神も大山津見神おおよまつみのかみ
 となっているが、もしこの神社が古いものであれば、元々は地元の神を奉っており、時代とともに大山
 津見となった可能性もある。

となれば直に土地神と相まみえることが出来るかもしれないし、そもそも雄鷄山の土地神である可能
 性もある。そんな期待がちあらにはあったのだ。

* * *

森の中に包まれるようにたたずむ三津窪神社の鳥居は、見上げると神秘的で荘厳に見えた。

近くには沢が流れ湧水もあることから、恐らくかなり古くから人間が住み着いていた場所であろう。

その古代の人たちの祭事場であった可能性が高い。だとしたら当時からの山神がまだ坐ましているかも知れない。

期待に胸を膨ふくらませつつ、ちあらは最初の鳥居をくぐろうとしたのだが、拒否された。

『えー……』

明らかに張り詰めた空気がちあらへの行く手を阻んでいる。

感覚的には急に気圧が高くなった感じ。しかも普通、気圧が高くなれば温度も高くなるはずなのだが、冷たい。まるで空気の壁である。

『ふむむ……』

もちろん強行する事は可能だ。しかし、強行は神に抵抗することになる。

ちあらは鳥居の前で柏手かしわてを打ち、礼をして神社に入ることを願ひ出た。

すると、自分の周りを取り巻く空気が少し軽くなったことを認識できた。同時に鳥居の向こうから光が差し込んできた。どうやらこの光の通りに来い、ということのようだ。

神社は山の中腹にあるため、参道はちよつとした山道になっている。杉林に囲まれた何段もの階段を登っては折り返し、また階段を登っていくと、最上段の向こうに拝殿の屋根が見え始めた。

神社の形態を取っているが、古くから仏教ともにあることが感じられる神社だ。修験者の修行の場であり、だから大轟山という山の名前がついているのだろうし、奥の院が山のテツペンにあたりするのだろう。

手水舎ちようずしやで手を清め、拝殿の前に立つと、ちあらはここに導いていただいたことに感謝を捧げるとともに雄鷄山についての呼びかけを行った。

すると神は純白で穢けがれていない布と、岩を暗示してきた。

『?』

わからぬ。

言葉で説明してほしいなあ、ちあらは問いかけてみたが……。

『アパ、ダマポ、イドウダヤパ……』

なにやら聞いたことのない言葉(?)が返って来た。

なにこれ、縄文? もっと古い言葉かも……?!

現代日本語が通じないとか、人間の願い事とかまったく聞く気のない神様なんだなーと思う。

となると雄鷄山を伝えるのも難しい……たぶん当時はそんな名前じゃないはず……。

ちあらは身振り手振りで雄鷄山の方向を指さしながら、なんとか伝えてみると、今度は岩だけが暗示された。どうやら岩が雄鷄山のことを指していたらしい。確かに雄鷄山は岩山である。

ああ、なんだ通じているのか……とホツとする。

すると今度はクマにたくさんの山という暗示が届く。クマは山の頂いただきに立ち、山々を照らしている。

『なるほど……』

これは解る。たくさん山〓山一つじゃなくてこの辺り一帯、そして神様はクマということなのだろ

う。となると白い布の意味はなんだろうか？ 岩と一緒に出てきたので、雄鷄山の何かを現している？
しかし、そこで暗示は途切れた。

ちあらが何を働きかけても、答えが来ることはなかった。

要するに、そのクマに会えと言うことか……？

ちあらはダメ元で自分のことをそのクマに伝えるように願うと、ようやく拝殿から降りた。

それからぐるっと境内を見渡し、社務所が売店にもなっていることに気付いて、ててと駆け寄った。

「たのもう」

中にいた巫女装束の人に声をかける。

「はい、いらっしゃい」

なかなか元気な年配の女性が窓口顔を出した。

「この辺に、クマは出る？」

開口一番、クマの話を出す。

相手は予想だにできなかった質問に少したじろいだがる、すぐに営業スマイルに変わると、

「クマに注意の看板はね、あるんですよ。登山者なんかね、見たって言うんですけど、あたしらは見

たことはないですねえ」

と答えた。

「ふむー……」

「それよりも、もー、シカが増え過ぎちゃって……大変なんですよ」

「シカ……」

暗示の中にシカはなかった気がする。

「冬の間には木の芽をね、食べ尽くすしちゃうんですよ。道路に出てきて事故の元になるし、畑は荒らすし、ほんと困ってるのよ」

「……」

クマはシカは食わないのだろうか……？ 等と思う。

「クマがいるかどうかは、登山客に聞いて見た方がいいかもしれないですね」

「あー……」

この話しぶりだと、別にこの神社がクマを奉っていると、クマを大事にしているとかそういうことはなさそうだった。もしかしたら遙か昔はクマを神か神の使いとしてあがめていたのかもしれないが……その後、神道が入ってきたり、仏教が入ってきたりで昔の記憶は欠片かけらも残っていないようだ。

白い布、岩、クマ、山々。

断片的すぎる。

「あ、ありがと」

「ちあらはテキストに交通安全のお守りを買って、お礼を言った。」

「いいえ、またいらしてください」

見送る声を聞きながら、ちあらは肩透かしを食らったような気分だった。とはいえ、この神社の神には自分の存在と雄鷄山に用事があることは伝えられたので、目的は達したと言えるだろう。

* * *

すっかり暗くなった夜の九時、立派なお寺の門の前でタクシーは止まった。今日最後の場所だ。寺は神社と違い、夜遅いと自由に入れるとは限らない。しかし寺にも本堂に拜む場所が用意されているはずだ。

山門にはかがり火がたかれ、門戸は開け放たれていた。

「開いてるみたいだから、行ってくる」

ちあらはその言葉とともに、リアドアが開く。

ちあらは飛び降りるように車から飛び出すと早足で山門をくぐり、本堂へと走った。

本堂の扉は閉まっていたが、中から光は漏れており、かすかながら読経とくぎょうの声も聞こえる。

外の闇へと漏れ出す本堂からの光は、黄金に輝いているようにも見えた。

ここで感じられる力はまったく別種のものであり、雄鷄山に関わることはなさそうだ。

『ここも、来なくても良かったのかな』

そんなことを思いながら本堂の前で一応手を合わせる。

すると読経の声がやみ、静々とこちらに布のすれる音が近づいてくるのが解った。ちあらは目を開けてしばし本堂の扉を見つめていると、少しガタついた音がしながらも目の前の扉が開いた。

中から若そうな——といつても三〇は過ぎているであろうが——僧が姿を現した。

「こんばんは」

僧はにっこりと笑うと視線をちあらに合わせるため広縁こうえんに膝ひざをつき、丁寧に挨拶あいさつをした。

「こ、こんばんは」

ちあらは少し唐突な出会いにうまく対応出来ず、抑揚のないぶっきらぼうな挨拶を返す。

「当院に何か？」

「読経の邪魔をして悪かった、わたしの祈りは済んだ」

この寺に雄鶏山の関わりは薄い。これ以上ここにいるのは迷惑だとちあらは思った。

「解決されたのでしたら、なによりです」

僧はにっこりと笑う。

ちあらも深くお辞儀をしてその場を離れようとしたそのとき、後ろ髪ひかれるというか、いや、予感というものだろうか？ゾクツとしたような気配を感じた。

慌あわてて振り返る。

だがそこには僧が平穏な表情でこちらを見ているだけだった。

「どうかなさいましたか？」

笑顔のままの僧が、少し首をかしげる。

「たった今、あなたに用事ができた」

ちあらはまっすぐ僧の瞳を見つめると、深く頷いた。

「そうですか、では立ち話もなんですからどうぞこちらへ」

僧がさらに扉を開けると、ちあらを本堂の中へと導き入れた。

本堂は畳敷きで四八畳もある立派なものだった。その畳敷きのさらに奥は板間になっていて、赤い絨毯じゅうたんの上に本尊が安置されている。

季節が季節だけにストーブが焚たかれていて、中はほんのりと暖かかった。

ちあらは僧と向き合って座ると、この場所に来た目的をかいつまんで話した。僧はちあらの言葉に相づちを打ちながらも黙って聞いていた。

「それは大変でしたね」

そしてこの寺が最後の場所だと知ると、穏やかな声で頷く。

いつの間に手配したのか、小僧が温かいお茶を持ってきてくれた。

「して、山から何を感じましたか？」

「死を呼びかける、負の力」

「左様さようですか」

「すでにたくさんさんの命が失われている」

「それは大変なことだ」

「それを止めに、わたしは来た」

「しかして、その死が必然だったという可能性もありませぬか？」

「どうということ？」

「その人達は、そこで死ぬ運命だった……とか」

「それはないと思う。まだ憶測でしかないけれど、魂が必要だったんだと思う」

「つまり、雄鷄山が魂を欲したと？」

「必然の死というものは誰かの意思によって決まるものじゃない。色々なことが積み重なって、最終的に逃れようのない死が決定する。誰かの意思で決まったのなら、それは殺人だと思う」

「あなたのいう運命の積み重ねが、最後の最後で人の手による死であった可能性は？」

「う……」

「多くの死へつながる必然が重なり、最後に人がとどめを刺さざるを得なかった。たとえその人が殺められなかったとしても」

「それを証明するのは難しい……と思う。わたしにはその人が殺したようにしか見えない」

「左様です。それを見極めるには輪廻りんねの系をたどらねばなりません」

「輪廻の……系？」

「魂は、今この時だけのものではありませんからね」

「……………」

それは輪廻転生のことだろうか？

その輪廻の輪の中で咎とががあるがゆえに死が確定したとしても言うのだろうか？

ちあらには仏教の考えが解らないため、僧の言葉を理解することはできなかった。

「ですから、その人の死だけを見て、すべてが決まるわけではないのです」

「ふむふむ」

たとえ殺人であったとしても、殺人者も、殺された人も、その人生だけでなく、輪廻の中で何らかの因果いんががあったかもしれない。その糸をたどっていけば、実は必然の死との出会いだっただのかもしれない。「悪しき魂だとしても、くれぐれも無用な殺生せつじょうはなさらぬよう」

「わたしは穢れたものを滅めすることしかできない」

「滅するなど、とんでもない。浄化されるのがよろしい」

「罪あつて死んだ者は、ただ滅びるのみ」

「難儀なんぎですな」

「わたしは救いを伝えることはできるけれど、直接救うことは出来ない。その人自身が救いを求めない限り、救われることはない」

「あなたが救ってはあげないのですか？」

「わたしにその権限はない」

「ならば、私が救ってあげましょう」

僧が一つ頷くと、口元が少しゆがんで不気味な笑みを見せた。

「！」

と同時に僧の後ろで揺らんでいた影が突然大きくなると、ちあらを飲み込むかのように襲いかかった。これがちあらの胸騒ぎの正体であった。

ちあらは落ち着いて自分の傍らに立っていた浄灯（燭台）をつかむと、迫り来る黒い影に突き立てた。
「破！」

ちあらの声と同時に蠟燭（ろうそく）の炎が爆発したかのように一瞬だが広がり、逆に炎が影を包み込む。

「おおおおおおおおおお……!!」

かなり低めの……おそらく女性のような叫び声とともに黒い影は形を崩しながらちあらの後ろへと流れ、そのまま外へと飛び出して行った。

ちあらはゆっくりと浄灯を元にもどし、呆然としている僧に駆け寄った。

彼の顔の正面に手のひらをかざして、解呪（リムーブカース）の呪文を唱える。

「う……」

すると僧の瞳孔が元に戻り、我を取り戻した。

そして目の前で起きたことを思い出すと、信じられないといった表情でちあらを見上げた。

「少し、心が乱れていたようですね」

だが、さすがは僧といったところか。落ち着いて、ゆっくりと頷く。

「まさか、この私にあのようなモノが潜ひそんでいたとは……あなたはそれが見えたから、私に用事かあると言ったのですね？」

「さすがに見えてはなかった。ただ、何かがいることは感じていた」

「そうですか……」

少し解げせないという表情をしたが、僧はちあらの言葉をそのまま受け取ると、立ち上がって本堂の外へ出た。

「今夜は、騒がしい気がします」

「わかるの？」

「どうでしょう……ただの胸騒ぎかもしれませんが……」

そう言って天を仰ぎ見た。

「少なくとも経をあげる気にはなりましたからね」

そして目を閉じて、頷いた。

「今日は朝から空気がおかしかった、そう感じておりました。そしてその原因はあなたがこの辺りを巡っていたからでしょう。あなたによってこの地が騒いでいたのです」

「なるほど」

「その雄鷄山、確かに何かがありそうですね。人では計り知れない、何か……」

「すでにわたしは目をつけられたと思う。わたしに関わった人間に影響が出ることがよくわかった」
 「あなたは恐らくとてもお強いのでしょう。なにせこの地を騒がすほどですから。となるとあなた自身には手を出せない、だから周囲を惑わしているのかもしれない」

「……………」

「またとない体験だったと思います。物の怪に憑かれるなど私もまだまだ修行がたりませんね」
 僧は苦笑すると、数珠じゆずを握る手に力を込め、首を左右に振った。

* * *

山門を出ると、タクシーがちあらの帰りをずっと待っていた。

時間は二一時半をとくに回っていたので、三〇分以上待たせたことになる。

ちあらは急いでタクシーに向かったが……運転席でちあらを待つ運転手が黒いオーラに包まれているのに気付いた。

まあ、それもそうか、などと思う。僧で失敗したのなら、次は運転手というわけだ、これ以上他人に迷惑はかけられないとちあらは深く頷く。

運転手はちあらに気付くとタクシーから下りてきた。今までならドアを開けるだけだったのに。

「なぜ同じ手を二度も使うの？」

ちあらは下りてきた運転手に問いかけた。

ところが今度は運転手自身がちあらに襲いかかってきた。なるほど、これが僧の時との違いかと思つた。取り憑いた人間なら直接手は出せまいということなのだろう。

ちあらは掴みかかってきた運転手の懐に入ると襟をつかみ、自分の腰に運転手の体重を預け、運転手自身の襲いかかってきた勢いを利用して投げ飛ばした。

ただし、襟は絶対に離してはいけない。アスファルトに頭を直撃させたら、ただでは済まない。背中全体を地面に打ち付けられて、運転手が「ぐう」という低いなり声を上げた。

痛みでまだ動けない運転手に呪詛を施すと、黒いオーラが霧散して消えていった。

「ん、あ？」

同時に運転手が自我を取り戻す。

「あれ？ なんてオレは……」

地面に仰向けに倒れてることを理解できずに戸惑うが、しだいに今までのことを思い出す。

何度か瞬きしたあと、表情が青ざめるのがちあらにも解つた。

「た、大変だ、おれは嬢ちゃんに……!!」

すぐさま起き上がってちあらに向き直ると、地面に正座して、ちあらに謝ろうとした。

どうやら、取り憑かれてる間も本人の記憶は失われないうだった。つまり先ほどの僧も、おそらく自身からわき出た何かがちあらを襲おうとしたことが見えていたのかもしれない。

謝ろうとする運転手をちあらはあわてて制止すると、首を左右にふった。

「あなたは何も悪くない。今日の神社巡りは見えざる力と関わりを持ったためのもの。何が起きても不思議はない。だから、今起きたことは忘れてほしい。わたしも決して誰にも言わない。あなたがわたしにしようとしたことは、あなたから出たものではないから。むしろ、あなたを巻き込んでしまったわたしのせい」

ちあらはそう言うのと、運転手に詫^わびた。

「これ以上、わたしと一緒にいたらあなたに迷惑がかかってしまう」

ちあらはそう告げて精算を申し出た。

「駅まではまだけっこうあるが、本当に大丈夫かい？」

「大丈夫、体力には自信がある」

胸を張るちあら。

「ま、オレみたいなおっさんを投げ飛ばすぐらいだからな。ビックリしたよ」

「てれてれ」

「この道なりに下って行けば駅に出るのは簡単だよ。青の案内標識通りに行けばいい」

「ありがと」

「最後まで付き合えないのは心残りだが、嬢ちゃんの言葉に従うよ。不思議な一日だったよ」

運転手はそう言って、苦笑した。

「わたしこそ、世話になった」

ちあらも頭を下げたあと運転士の手を握って、別れを告げた。

去り行くテールランプを見つめながらちあらは雄鷄山に自分が認識されたことを確信した。これは雄鷄山からの宣戦布告である。いや、地縛霊を払ったことが、雄鷄山に宣戦布告と映ったのかもしれない。僧も言っていたではないか、この地が騒いでいる、と。

しかも僧や運転手の精神を乗っ取れるとは、かなり強力だし、地縛霊などと違って確固たる自己と知能を持っている存在であることが解る。もしかしたら言葉を解するかもしれない。

しかし正体は皆目見当がつかなかった。

白い布、岩、山々、そしてクマ。

霊なのか、神なのか、それともそのほかの魑魅魍魎ちみもろりょうの何かなのか。

そういえば僧は「物の怪」と言った。そして浄化するのが良いとも。

そこにヒントがありそうな気もする。

ちあらはそう思った。

* * *

ちあらが塩山駅に戻ってきたのは高尾たかお・東京方面の最終電車の時間よりわずかに二分前だった。

時刻は二二時二六分、最後のお寺から塩山駅までは約一二km。ちあらは時速二〇kmほどで駆け抜けてきたことになる。

少し息を切らしながら、電車に飛び乗る。

もー、鞆の中がぐちゃぐちゃだ。

お土産袋も全部鞆に詰めてきたからだ。

鞆とシヨルダーベルトをとめる金具が一部バカになっている。それくらい人が時速二〇kmで走ったときの振動はバカにできないようだ。

通学鞆じゃなくて登山用のリュックとかだったら平気だったのかも……とか思う。

「んしょ……」

ちあらは揺れる電車の中で鞆の中を整理した。

この車両に、乗客はちあら以外いない。

一通り荷物の整理をつけてから、ちあらは今日のことを振り返った。

正直、寺社巡りはほぼ不発と言って良かったが、しかし、無意味だったわけではない。三津窪神社と最後のお寺だ。雄鶏山は確実にちあらを認識したと言ってもかまわないだろう。

『あなたは恐らくとてもお強いのでしょう。だから周囲を惑わしているのかもしれない』
 『そしてあの僧の言葉が気になる。』

今日のどこかの時点で雄鶏山はちあらを認識し、ずっと後をつけていた。そして、あの僧に取り憑い

たのだ。

もしかしたら今でもちあらの動向を伺^{うかが}っているかもしれない。

が、今は何も感じなかった。気配を消しているのかもういなのか知りたかったが、
姿を隠す魔法を見破る術は、今日とは違っていなかった。

「む……」

とはいえ今回の件は地縛霊から始まっている。

『もしかしたら死者に関する呪文を使えば、何か解るかも……?』

ちあらはそんなことを思い立ち、ダメ元で死^{デイト}者^{クト}を見つける呪文を唱えてみた。

「……」

が、目の前には何も現れなかった。

でも何やら上の方からかすかな気配が……と、ちあらが視線を上げたときだった。

「ひ……!」

巨大な目ン玉が一つ、ちあらのことをじっと見つめていたのだ。

ちあらの頭上、ほんの一mくらいのところに、ぼうつと浮いている。大きさはバランスボールくらいはあろうか? ただディテールははっきりとしない。本来この目玉は対透明化の魔法でしか見られないのだが。この目玉を作り出した者が死者^{アンデッド}であるせいか、死者を見破る呪文にも反応してしまったようだ。

『お、おまえか——!!』

ちあらは心の中で叫んだ。

いつから尾行^{おし}けられていたのだろうか？ おそらくタクシーの中にもいただろうし、あの寺の本堂の中にもいたに違いない。

「あなたは、何者？ 何故、魂を集め続けている？」

ちあらはその大きな目玉に問いかけた。

だがその大きな眼球は微動だにせず、ただちあらを見つめているだけだった。この目玉は情報を送るためのいわゆる監視カメラ的な作用しかないようだ。

「必ず、あなたに会いに行く」

ちあらはそう告げると、目玉を消そうとディスプレイの呪文を用意しようとしたが……その前に小さくなくなって行ってしまった。

おそらく雄鷄山の力が届かなくなったのだろう。

それにしてもその範囲は恐ろしく広いとちあらは感じた。慌ててスマートフォンでマップを開いて、雄鷄山からの距離をはかる。

電車はちょうど笹子^{ささこ}駅を出たばかりで、ここから先は力が及ばなくなってしまうようだ。

『なんか今日は疲れた……』

ちあらは長いため息をつくとき、シートに身体を預けて目を閉じた。

車内はとても暖かい。

シートの下からぬくぬくと暖気が立ち上ってくる。

「どうせ御茶ノ水駅まで二時間はかかる。

このまま、この暖かさにまどろみを託してしまいたい……。」

『なんて甘いことを考えていた時期もありました』

日付の変わった夜の〇時二〇分頃、ちあらは中野駅南口前に立っていた。

「……」

どうやら塩山駅の上り最終電車では、中野駅まで来るのが限界だったようだ。中野発、新宿・千葉方面行きは〇時五分発の御茶ノ水駅行きが最終。東京メトロ東西線も西船橋方面行きは二三時五三分に終わっていたのだ。

高尾駅から出ている電車がすべて東京駅まで行くとはい込んでいたが故の敗北であった。

「おなか、すいた」

ぼつりと一言つぶやくと、ちあらはトボトボと大久保通りを東に向かって歩き出すのだった。

三、雄鷄山とは、何か？

翌日のちあらはほとんど使い物にならなかつた。

なぜなら、眠いからである。授業中に何度も欠伸あくびをしてしまった。

結局、中野駅から自分の神社までは二時間ほどを要した。その距離約一二km。偶然にもタクシーを降りて塩山駅まで走った距離と同じだった。そのときは人とすれ違うことなどまったくなかったのに、東京では人はたくさん歩いてるわ、車は邪魔だわ、信号は多いわ……とても同じ一二kmとは思えなかつた。

「ふああ……む……」

寝るのは朝方になってしまい……遅刻こそしなかつたものの、授業中はうつらうつら、部活では受け答えもいい加減、帰ってきてからも、コタツに入つてぼーっとしている始末だ。しかしここで寝てはいけないのだ。寝てしまうと夜型になってしまう。

それにしてもコタツは暖かい。すべてのやる気を奪う。

人類はなんと罪深い装置を發明したのだろう。これほど人間を墮落させるものがあるか？

「いや、ない……むにゃ」

しかし昨今、コタツは家庭の中から消えつつあるらしい。

人類はついにコタツと決別し、墮落の淵から抜け出したのだ。人類の未来は明るい。などと阿呆なことを考えていると、ピンポーンと呼び鈴が鳴った。

『え……………』

と心の中でつぶやく。だってコタツから出たくないから。

ピンポーン！

『も……………』

もそもそとコタツから出て緩慢な動きで社務所に向かうと、賽の目クラブの部長、こなみがズカズカと入ってきていた。

「やほー」

手には放課後、部で渡したお土産をぶら下げている。

「え……………」

「眠そうな顔してるわねー」

こなみは呆れると、持ってきたお土産——ほうとうセット——をちあらに手渡した。

「晩御飯一緒に食べようと思ってるさ」

「え……………」

「ななみは彼氏と一緒にサッカー見るんだって」

こなみはちょっと頬を膨らませると、双子の妹の幸せに嫉妬した。

「彼氏、大阪なのにな？」

「LINE使って一緒に観るらしいわよ」

「あー」

「というわけであたしの分だけ持ってきたから、作って！」

「えー」

「イヤそうな顔するわねー」

「面倒くさい」

「でも晩御飯は食べるでしょ？」

「そうだけど……」

「カボチャはないと思って、カボチャだけは買ってきたわ」

「そう言っで、でんとカボチャをコタツの上に置いた。」

「立派なカボチャ」

「ちよつと調理する気になる」

「まあ、このままポケットとしてるよりはいいか。」

「ちあらは両頬をぺしぺしと叩いて気合を入れると立ち上がったって台所に向かった。」

「白菜、大根、人参、長ネギ、豆腐、春菊……」

「しめじも入れよう。」

お味噌はほうとうについてるようだが、味が足りなかった時のために味噌も用意する。前に大雨の洪水で長野市に派遣された時もらった信州味噌を取り出す。

ゴボウも使おう、最近甘くする方法を覚えた。

「なんか手伝おうか？」

こなみがひよいと台所に首だけ突っ込むが、ほうとうはひたすら具を煮るだけなので、手伝ってもらうことがあまりない。

「あ、IH出して」

しばらく考えて、ポンと手を打つ。

「OKOK」

勝手知ったる他人の家。こなみはためらわずに吊戸棚にしまっているIHクッキングヒーターを取り出して、いそいそと居間に戻っていった。

「IH、いちおう、拭いとくわよー」

「おねがいー」

あらかじめ煮えたら鍋ごと居間に持って行く。目安はゴボウが嚙れるくらい柔らかくなったのだ。

「お待たせ」

鍋をIHの上でんと置く。

いつの間にか箸と呑水が用意されていた。こなみが勝手に食器戸棚から持ってきたらしい。

鍋とは違うと思うんだけど……と思う。うどん鉢に入れるのが正解じゃなからうか？

「なんかちがくない？」

「え、そう？」

「ま、いいけど……」

「細かいことは気にしない気にしない……おわちっ!!」

「煮えたぎっている」

「ふ——！——ふ——!!」

「一生懸命とんすいによそったほうとうを冷ます。」

「唇やけどしたあ」

「……………」

「舌じゃなくて唇なんだ？ とか思う。」

「慰めてくれないの？」

「それだけ慌てたら、ヤケドもすると思う」

「冷たい対応ねー」

「冷たくした方が冷えると思って」

「えー!! ヤケドしたところを優しくキスとかしてくれないの？」

「……………」

なに言っただコイツ的な眼差しを送るちあら。

「うわ、ノリ悪わるっ！」

「今日は眠いからエツチなことはしない」

「ちえー……」

こなみが一人でここに来るときは、だいたい飯かセックスのどちらかをねだりに来るのだが……今日は両方だったらしい。

「せっかくシャワー浴びてきたのに……」

「また今度」

「今度っていつ？ 三分後？」

諦めの悪い人だなあ……。

「今はほうとうを味わうべき」

「まだおなか空いてないのよねえ……」

じゃあ、なんでここに来た？

とちあらは心の中で突っ込んだ。

というか、たぶん最初はおなか空いていて……何がトリガーかはわからないが、性欲が勝ってしまっただろう。

「だってちあらが料理している後ろ姿を見てたら……じゆる」

「よだれ出てる」

なるほど、性欲が食欲を凌駕りようがした理由はそれか。

それにしてもこなみの感覚はよくわからない。胸はEかFはあるし、スタイルも胸は大きいくせに腰は細くて全体的にはシュツとしていて締まっている。彼氏なんていくらでも作れそうなのに、何故かちあらかに欲情する。

かといってレズというわけでもない。

頭がいいと性的な思考もおかしくなったりするんだらうか??

「はやく彼氏を作ってほしい」

「彼氏、ほしいー。でも世の中ロクな男がいなくて……別にあたしの身体目当てでもないけど、なんか一目置ける男ではあつて欲しいのよねえ」

ま、そうでしょうね。学年トップというか全国模試でもトップ一〇位に入るくらいの人だから、少なくとも同学年の男子は並の男以下なのだろう。

「あ、そろそろ冷めてきたかしら?」

こなみはおもむろに視線をちあからから目の前の香水に移すと、汁をそっとすすった。

「うん、イイ感じ。出汁も利いてるわね」

そして満足げに微笑む。

興味がちあからからほうとうに移ったので、ちあからはホツとした。

「賽の目クラブのときも聞きそびれたけど、何でそんなに眠いの？ 昨日、何があったの？」

「終電に乗り遅れて……中野から歩いて帰った」

「はあ？ タクシーは？」

「いくらになるか解らなかったから……」

「中野から深夜だといくらなんだろう？ 深夜は遠回りされちゃうとか聞くし」

「歩きが確実」

「その感覚もどうかとは思う」

「むう……」

「今回の仕事は、長いわね」

「こなみはちあらの能力やちあらが相手する霊だの怨霊だのを信じてくれる数少ない理解者だ。」

「コク……」

「手こずってるの？」

「相手の正体がよくわからないから、手間取っている」

「へー」

「昨日は本丸を攻める準備をしてきた」

「なるほど……」

「相手の実力ややり方もだいぶ解ってきた……と思う」

「探り合い、か。敵もちあらの能力を探ってそうね」

「わたしのほうが多くの情報を与えてしまったかもしれない……」

「あら」

「それで諦めてくれるといいけど……」

ちあらの底知れぬ力を感じてきたなら、ちあらと一戦交えようとは思わないはずだ。

少なくとも雄鶏山にはそれだけの知能があるはず。

「目的にもよるんじゃない？ ちあらがターゲットなら諦めるかもだけど、違うなら微妙かも」

「むう……」

目的はたぶん人間の魂だ。そして恐らく継続的に魂を得なければ存続できない存在なのだろう。

ちあらがああ魔のカーブを除霊したことによって、魂を得る場所がなくなってしまった。おそらく雄

鶏山はちあらに対して怒っているだろうし、新たな魂を得る方法を模索しているはずだ。

「ん？」

「なに？」

「それって神様なの？」

こなみはその話を聞いて、首をかしげた。

「どういうこと？」

「土地神なら、その土地で死んだ人の魂を自由に出来るんじゃない？」

「あー」

「事故を起こさせてまで魂をとるなんて、なんかおかしくない？」

「たしかにそれはそうなのだが……」

「そもそも神様って魂食うの？」

「それは神による。生け贄を求める神がいるように」

「あ、そっか、そういうヤツもいるんだっけ……で、そういう神様って魂をどうするの？」

「そのまま食う。神が存在するためのエネルギー源、人間で言うなら栄養源みたいなもの」

「ふーん……」

こなみはイマイチ納得できないようだった。だいたい人間ごときの魂に、神を維持するなんの作用があるというのか？ それは他の生物ではダメなのか？ いや、そもそも魂とはなんなのか？

「あー、でも昔話や怪談とかでも妖怪が魂を欲しがったりするわよね」

「人の魂に、何故そこまでの価値があるのかは、わたしもよくわからない」

「あ、そうなの？」

「今から聞こうとしたのに……」

「ただ心当たりはないこともなくて……」

「うんうん」

「人間を作った神はより上位の神で、土地神とか土着の神にとって、そのより上位の神が作った生命で

ある人間の魂は、とても価値があるもの……なのではないかとー」

今まで邪神も含め様々な神に出会ったが、彼らは人間を特別視する。

それは過去の記録——言い伝えや神話、歴史書など——でも一致している。

「歴史や神話は人間が残したものだから、人間が特別なのは当然じゃない？」

「そうでもない」

「へ？」

「神や妖怪が残した書物や言い伝えもある」

「へー、そうなんだ？」

「ただ……」

「ただ？」

「こなみの言うとおり、今それを伝えているのは人間ではある……」

教典も神話も、今となっては人間が編纂へんさんしたものしか残っていない。

「神様から聞いたことでも、人間が勝手に改変しているかもしれない？」

「コク」

「そんなことしたら天罰が下るんじゃない？」

「……」

「どうだろう。」

神の普遍的な目的の一つに「信者を増やす」もしくは「自分の民を増やす」というものがある。その目的のために改ざんされたのであれば、神は怒らないのではなからうか？ たぶん……。

「なにそれ、いーかんげん。まるで人間みたい」

「ん」

それは間違っている。人間が、神に似ているのだ。

人間が進化の過程で生まれたのか、どこかの神に造られたのかは置いておいて、少なくとも人間が生まれる前から神はいただろうし、多くの神話でもそうになっている。それに多くの動植物は神を認識している。人間がこの世に生まれる、遙か太古から。

つまり人間も進化する前の動物——類人猿？——の時代から神を認識していたはずだ。

「もし、人間がより上位の神に造られたのなら……」

「うん」

「人間を造った神は、自分の民を増やすのに成功している事になると思う」

「あー、それ面白いわね」

弱肉強食の自然の摂理から抜け出し、ほぼ地球全土に広がった人間。

「もしかしたら、人間を造った神様ってのは、かつてはアフリカの土着の小さな神だったかもしれないってことね。ロマンある話だわ」

こなみがアフリカの神だと思ったのは、現生人類発祥の地がアフリカとされていることと、ミトコン

ドリアイブがアフリカの女性だったことから来ていると思われる。

「ただ信者は増えてないみたいだけど」

そしてそうも付け加える。

確かに人間は自分たちを造った神を憶えてはいないし、神を信じる者は減った。

「ま、話を整理して、とりあえず人間の魂は、神様や妖怪の格好の餌なワケね？」

「たぶん」

「でも神様なら魂の調達には不便しないはず。信者がいる限り」

「コク」

「どういうことはつまり、犯人は？」

「どっちかっていうと妖怪……かな」

「んで、死者の術に反応するヤツとなると？」

「知能のあるアンデッド……かな」

「はい、結論でました」

こなみが嬉しそうに箸で吞水をチンチンと叩いた。

アンデッドでいいのかな。整理するとそうかも……？ いや、まだ妖怪の可能性も残っている。僧は言っていた。「物の怪」と。あ、でも物の怪という言葉はアンデッドも含む気はする……。

「なにを、している？」

思案しているちあらに、いつの間にかこなみがまとわりついてた。

妖怪か？

「ん？おなかも一杯になったし、犯人の目星もついたし、あとはエッチするだけかなーって」

「……………」

諦めてなかったのか……と、呆れる。

「眠いなら、そのまま眠っててもいいわよ。夢の中で気持ちよくしてあげる」

こなみはそう言って、ちあらをぎゅっと抱きしめた。

あー、ずるい……。優しいけれどもどこことなく頼れるこなみの抱擁。

その気がなくても、自然とその気になってしまう……。不思議な抱擁だ

何よりも心地よい。

ずるいなあ。

「ん——」

こなみが甘えるようにちあらにすりすりする。

まあ、いいか……。

眠いなら眠いまま、面倒なら面倒なまま、そして心地よいなら心地よいままに、この身体をこなみに預ければ、なんかそれで丸く収まる気がする。

そんなことを思いながら、ちあらはこなみの口づけを受け入れた。

四、初黒星

それからさらに二週間後、一月も終わりを告げる頃、ちあらは登山道の入り口に立っていた。今日のちあらはひと味もふた味も違う。

巫女装束ではないのである。

登山と言うこともあって完全に山装備だ。キュロット付きのトレッキングパンツに、ボアベスト、その上にパーカ、背中には買ったばかりのリュックサック。いや、そもそも全部買ったばかりなのだが。一応巫女装束を意識したのか、キュロットは緑系、ベストは白系を選んだようだ。

靴もしっかりと登山用のものだ。靴擦れしないよう、慣らしも完璧だ。

昨今登山者が増え、山ガール等という言葉もでき、登山用ファッションの充実ぶりはちあらにとって嬉しいことだった。アメ横で時間が経つのを忘れるほどショッピングを楽しんでしまった。

小ぶりのリュックサックの中にはお弁当！これは大事である。早起きして作った。

そして今回は打刀と脇差しも装備だ。かわいらしいウエストポーチとベルトをうまく使って、腰に二振り差している。

「ぶ、物騒ですね…」

「図面ケースから刀を取り出して腰に差している様子を見ていた県職員が、少したじろいだ。ファッシヨナブルでかわいらしい格好とは対照的で不釣り合いな代物だ。」

「わたしの太刀筋は霊のみならず、神をも切り裂く」

ちあらは腰にセットすると、誇らしげにポンと左手ではたいた。

同時に物騒な金属音が響く。

実際、ちあらはの刀は名匠が打ったものではあるが、魔法の武器ではない。したがって幽体や異世界の存在を傷をつけることは出来ない。しかし、ちあらがこの刀を振るえば、たちまちこの世のモノではない者を切り裂く。

さらに車の荷室から大きなバッグも取り出す。あらかじめ宅配便で山梨県庁に送っておいたものだ。

「これは何が入ってるんです？」

県職員がちあらの身に余るほど大きな荷物を指さした。

「結界用のしめ縄セット」

「はあ……」

「設置すれば解る。みんな一度は見たことがあるもの」

ちあらはそう言って、自分で担ぐのを諦めて、バッグを県職員に託した。

「はいはい」

県職員がそれを肩に担ぐ。

「こっちの袋は……？」

車の荷室にはもう一つ、巨大な巾着きんちやくのような袋が置かれていた。

「そっちは置いておいて大丈夫」

「了解」

登山道入り口の駐車場には県の車以外にもう一台、大きな車が駐まっていた。

ドコモの中継車だ。

ドコモ社員も二人、着いてくると言う。

「雄鷄山山頂付近は電波が通じないんです」

わざわざ山梨県が依頼したものだ。この件の山梨県の本気度がうかがえる。

「よ、よろしく……」

突然の同行者の増加に、ちあらは少し戸惑った。

なぜなら、守らなければならぬ命が増えてしまうからだ。

「それじゃあ、まずは沢登りの道と登山道が分かれる広場まで行きましょうか」

登山が趣味の県職員はそう言うと、皆の先頭に立って登山道の中に入っていく。

道はすぐに上り坂になるわけではなく、近くのダムに注ぐ沢そ沿いにしばらくは緩い坂道が続く。

「登山と沢に分かれる地点はちよつとした広場になってるんです。そこで今日の案内人と落ち合うこと

になってます」

「県山岳会のメンバーだと聞いています」

「コク」

ちあらは進みながらも周囲の木々や鳥たちから情報を収集する。

山に異変はないこと、木々は穏やかであることを知ることができた。また、山の神が近くに来ていることも教えてくれた。

クマのことだろうか？

一五分ほど進むとなるほど確かに広場と言えるくらい開けた場所に出た。

トイレやベンチなどが置かれていて、またかつては休憩所を兼ねた売店もあったらしいのだが、建物はすでに廃墟と化していた。

そんな広場で屈伸運動をしている、割と年配の人がいた。

「あ、山岸さん！」

県職員が声をかけて、駆け寄る。

すると彼はくるりと振り向いて、笑顔を返した。

「いやあ、どうも」

少し白髪の交じった六〇代前半ぐらいだろうか？ 身体はかなりシユツとしていて筋肉質なのが見取れる。そして若い頃はイケメンだったろう事も。

「今日はよろしく願います。こちらが山岸さんのサポートを頼みたい子、月夜野さんです」

「月夜野ちあらです、よろしく願います」

ちあらが前に進み出て、ペこりと頭を下げる。

「おや、かわいらしい登山客だね、よろしく」

「我々はここで展開します。携帯のアンテナも立てますから、頂上でも電波が入るようになりますよ」

「それは頼もしい。一応、無線も持って来てはいますがね」

山岸はそう言って腰にあるトランシーバを見せた。

「おお、さすが、用意がいいですね」

「月夜野さん、雄鶏山は素人が登れる山じゃないから、申し訳ないけどもし危ないと判断したらそこで中止することもあることは憶えておいて」

「コク」

「そうですね、最後の鎖場は慣れてる人でもかなりきついと思います」

登山が趣味という県職員もうなづいた。

「最悪、岩のある場所まで来られれば……」

「それじゃあさっそく行くか。私の足でも片道四時間はかかる。早く出るに越したことはない」

「ま、待って」

ちあらは県職員がかついでいるバッグの元に駆け寄った。

「ああ、これですか？」

県職員がそれを地面に下ろすと、ちあらはファスナーを開けて中身を取り出し始めた。

出てきたのは七夕たなばたに使う笹といえるくらいの小さめな葉の付いた竹が二本、ティツシュ箱くらいの神棚、そしてバットぐらいの大きさに削り出した杉の木が四本としめ縄だった。

「あ……」

地鎮祭とかに使う聖域を作るためのものようだ。

ちあらはそれらを通る人の邪魔にならないところに設置する。まずは杉の柱を四本立てて正方形を作る。本来は地面に差すのだが時間も惜しいので木々やベンチを利用してくりつけた。そのうちベンチに固定した二本に竹も一緒にくりつけ、最後にしめ縄で囲って終わりだ。ちょうどベンチが祭壇になったので、神棚を座面に置いて榊さかきの枝を差す。

「もし異変を感じたら、この囲いの中に入って。この中なら雄鷄山は手を出すことができない」

「は、はあ……」

急にオカルトチックになってきたので、県職員もドコモ社員も生返事しか返せなかった。

「だまされたと思って。命に関わることだから。雄鷄山の力はそれくらい強力」

ちあらは真剣な表情で訴えた。

「わ、わかりました」

とりあえず何かオカルトチックなことが起きれば、入ればいいのだろう。

「お待たせした」

ちあらは山岸の元に戻って、ぺこりと頭を下げた。

「じゃ、行こうか」

いよいよ雄鶏山への登山がはじまりだ。

登山道はいきなり登りになるわけではなかった。いくつもの沢と交差しつつも徐々に沢からは離れて行き、登り道になってくる。最初の三十分は比較的緩い道が続き、余裕だった。

案内人の山岸はとも物知りで、出会う植物や地形について色々と解説してくれた。

聞けば彼は猟友会のメンバーでもあり、害獣駆除の傍らジビエ料理なんかも手がけたりするらしい。地元レストランと提携して、イノシシや鹿の肉を提供しているのだとか。

「クマに遭ったことはある？」

「あるよ。でもこの辺はそんなに多くないね」

「一頭しかいないの？」

「そんなことはないよ。でも里に下りてくることは滅多にない。だから私も熊を撃ったことはないんだ」

「ふむふむ」

「ここ一帯にいる熊たちは人と関わらない方がいいことを知ってるのかも知れない。あとは山が豊かなんだろう。里に下りなくても食べるのに困ってないみたいだ」

「なるほど」

「そういうえば、ひととき大きなツキノワグマを見たことがある。ありゃあ、山の神だな」

などと言う会話も数時間も経つと出来なくなっていた。

その余裕がちあらにないのだ。

一方の山岸は、さすがというか、息を荒らげることもなくスイスイと登っていく。

しかしちあらはだいぶ腰と膝にきていた。

普段、武術のトレーニングは怠らないし、持久力も鍛えてきたつもりだ。行方不明者捜索には人が足を踏み入れないような場所に赴くことも多い。

しかし、何時間もずっと登りっぱなしということは今までほとんど経験したことがなかった。そもそも行方不明者の捜索も、魔法で見つけてその場所を現地の警察や消防に知らせるのがメインであって、わざわざ歩いて探し回ったりするわけではない。

一步の歩幅もだいぶ狭くなってきた。

「休憩しようか」

見かねた山岸が歩みを止めた。

「あ、ありがと」

少しホツとして、ちあらは身体のを抜く。

「だいたい、腰にそんな重いモノをぶら下げていたんでは体力も持たないだろうに」

重心が刀を差している左に偏り、そのバランスを保とうとすることで余計に体力を消費していることを、山岸は教えてくれた。

とはいえ山岸の所持品が決して軽いわけではない。素人であるちあらがいつ倒れても大丈夫なように、簡易 TENT や救命用具などを持ってきてくれている。

その重さは一〇 kg はあるのだという。

「すごい」

もちろんちあらにも疲れをとったりする術はある。しかし術は一日に使える回数が決まっているため、もし雄鶏山と対決することになったら一つでも無駄にはしたくない。

疲れを取るのには戦う前の一回だけにしたい。

「私が代わりに荷物を持ってあげてもいいが……刀に触れることは恐れ多い」

刀は武士の魂と聞く。

ちあらが武士なのかどうか解らないが、この登山にまでも肌身離さず持ってくるということは、この少女にとってとても特別なものであると山岸は推測したのだった。

「ここはすでに敵陣の中。外すわけにはいかない」

ちあらは真剣な表情で答えた。

「だろうな」

山岸は少し呆れもしたが、その心意気は嫌いではないようだった。

それからさらに一時間、ようやく木々を抜け、目の前に大きな岩肌が見えてきた。最後の難関、鎖場である。

「少し休憩しよう」

山岸はちあらを適当な岩に腰かけさせると、鎖場の登り方をレクチャーした。

雄鶏山という名前はこの岩場が雄鶏おんどりの鶏冠トサカのように扇状おうぎじょうになっているところから来ており、その名の通り切り立った岩が天に向かって伸びていた。

「鎖から手を離さないように。軍手を貸そう。そもそもこの気温だと鎖そのものが冷たい」

なるほど、軍手は持って来ていなかった。

「斜面になっているところは登山の延長で行ける。滑りさえしなければ鎖を伝って登っていけばいい。問題は垂直に近い場所と、鎖と足場が離れている場所だ」

「鎖と足場が離れている場所？」

「鎖はもう何十年も前に掛けられたものだから、ずれて足場のない場所にかかってたりするんだ。となるところは鎖を頼れない。ほぼロッククライミングと同じ状態になる」

「な、なるほど」

「まず私が昇るから見て憶えるんだ。で、私は一旦降りて下からアドバイスするから、登ってみろ」

「わ、わかった」

気を引き締める。

息が整い心臓の鼓動も平常時と変わらなくなってから、二人は鎖場を登り始めた。

まず山岸がある程度登る。どこに足を掛けるべきかを観察してから、ちあらが登る。違う場所に足を

掛けようとしたら、すかさず山岸の怒号が飛ぶ。

「そっちじゃない、もっと右」

「こ、こっち？」

「そう。ちなみに、いま足を掛けようとしたところを蹴飛ばしてみろ」

そう言われたので、自分が置こうとしたでっぱりを蹴っ飛ばしてみると、ぼろぼろと崩れてしまった。

「わわわわ……！」

「全体重を乗せなくて良かったな」

「コクコクコク……」

そんな地道な作業を繰り返しながら、約八〇メートルの岩を切り切るのに二時間以上を要した。走れば一〇秒もかからない距離なのにも思いつつも、登るのに夢中だったせいか、そんな長い時間だとは感じなかった。

「ここは私が先に登って、ロープを張ろう。さすがに垂直区間が長すぎる」

最後のほぼ垂直に切り立った岩壁。

しかも鎖が遠く離れている。

山岸がほとんど足場のないところに足をかけながらスイスイと登っていく。

すごい、とちあらは素直に感心した。

「この壁を登り切ったら三角点のある山頂だ。あと一〇mもない」

「おー……」

「まさかここまで登れるとは、思ってもみなかったよ。よく頑張ったね」

そう言いながら山岸はザイルを固定して、垂らした。

何度も自らが体重をかけてザイルが落ちないか確かめると、ちあらに投げてよこす。

「所々ハーケンが残っているから、そこに足をかけるといい」

「ハーケン？」

「金属の板が飛び出しとるだろう？ 本当は打ち込んだ人が回収しないといけないんだがあまり強くハマっていると取れないこともあってそのままになってるんだ」

山岸はそう言いながら、自分の近くにあるハーケンをかかどで蹴って、ハーケンの例を示した。

「な、なるほど」

確かに岩肌をよく見てみると、小さな突起がいくつも見える。これらに足をかけて登れば良いようだ。ちあらはザイルをつかむと、今までの要領で登りはじめた。

ハーケンに足をかけ、両手でザイルを持ち、ぐっと足に力を入れる。ハーケンが緩むことがないことを確認したら両腕で上半身を持ち上げながらも、さらに踏ん張って身体全体を持ち上げる。

「んっしょ！」

あともう少しだ。そんな思いがちあらを急かした。

今度は右足をハーケンにかけ、ロープをつかむ腕にぐっと力を入れたときだった。

ジャン？グジャン？という聞き慣れない音。例えるなら、ギターの弦が切れたような、いや、テキトーに弦を押さえて弾いたようなそんな音が響いたような気がした。と同時に非常に激しい殺意がちらを襲った。掴んでいたはずのザイルの手応えがなくなり、ちあらの上半身が空中へと投げ出される。ぴんと張っていたはずのザイルが垂れ下がるその向こうに、山岸の歪んだ笑いがあった。その手には鋭いナイフが握られていた。

とっさに足の甲をハーケンに引っかけようとしたが、そんな曲芸めいたことは無理だった。

一気に落下する。

『じゅ、重力制御……！』

術を使おうとした瞬間、突き出した岩に腰のあたりを強打する。

「ッ！」

骨が砕け、脊髄が断裂した。この時点で下半身は制御不能になった

『あああ……』

意識だけは失わないようにしなければ。

痛みを遮断するためにアドレナリンとセロトニンを最大限に放出する。

必死に顔をうつむかせて、さらに手足を縮めて……とはいえ脳の指令は下半身には届かない。しかも身体中から送られてくる痛みのせいで術を発動する余裕はほとんどなかった。

突き出した岩に二〜三回ぶつかり、最後は岩棚に全身を打ち付けると、ずると滑って、そのまま樹

海の中に落ちていった……。

* * *

落下してきたちあらは何本かの枝を折りながら、巨大な幹にぶつかって止まった。

体中の骨が砕け、足はあらぬ方向を向いている。

ちあららの脳にはさまざまな情報が送られ続けていて、常人であれば氣を保つ事は不可能であったであろうが、痛みを遮断して、なんとか意識を失う事は免れた。

彼女の場合、意識さえ失わなければどうともなる。

目で周囲の景色は見えているはずだが、脳が処理できないのか薄ぼんやりとした景色しか認識できなかった。

『ハジメノホ起火……!』

ボンッとちあららの胴体が燃えるのだが、木がざわめき、ちあらを地面におっことした。

ぐしゃっという変な音が響くが……幸いにも枯れ葉が降り積もった、比較的柔らかい場所ではあった。

『あああ、ごめん……なさい』

声は出せないで心の中で木に謝って、慌てて炎を引っ込める。

大体、山火事になったら大変だ。

ちあらは体内の温度上昇にとどめた。その温度は二〜三百度ほどで、体表温度は百度にも上る。しかし、燃やせない以上、回復には時間がかかる。

ちあらは不死鳥と同じく、炎（エネルギー）によって復活することができる。つまり今いる場所が絶対零度の真空でなければ復活することが出来、その回復速度は温度や降り注ぐ放射線の量に比例する。

そして彼女の心臓は太陽でできているため、火種に困ることはない。意識さえあれば自分を燃やして、復活することができるのだ。ただここは森の中。燃やせば木々に影響が出る。

なので、枯れ葉が燃えないギリギリの温度で回復するしかない。

一方、ちあらが視界から消えたのを確認した山岸は、すぐさま下山を始めていた。しかも彼は空中を飛ぶように山をあっという間に下りていく。山岸を乗っ取った者の魔の力であろう。

広場ではアンテナの近くに二人のドコモ職員がモニターしていて、県職員はベンチで雑談していた。登山道の方から山岸の姿が見えると県職員の一人がそれに気づき、立ち上がった。

「山岸さん！」

しかし、その後ろにちあらの姿はない。

「月夜野さんの姿がないな」

「そもそも戻るのが早すぎる」

「何かあったのかも」

そう話しながら、県職員の一部が山岸に近づいた。

「月夜野さんは……？」

と尋ねようとした時、山岸が後ろ手に持っていたナイフを繰り出すと、県職員的首を切り裂いた。あまりの瞬間の出来事に誰しもが目の前の状況を掴むことができなかった。

血飛沫ちしぶきを辺り一面に散らしながら、県職員がつんのめって倒れる。

「布施ふせさん！」

もう一人の県職員が駆け寄ろうとしたが、ちあらの言葉を思い出した。

『もし異変を感じたら、この中に入って』

そうだ、これは彼女が言っていた「異変」だ。

「囲いに逃げ込め!!」

ドコモ職員も慌ててちあらが作った結界に向かって駆け出したが、一人が山岸に追いつかれ、背中を一突きされて倒れた。山岸はすかさずその上に馬乗りになり、ドコモ社員の髪を掴んで頭を持ち上げると容赦なく頸動脈を切断した。

とんでもない手際の良さだった。

「うわあああ」

それでも県職員ともう一人のドコモ社員はなんとか結界の中に飛び込むことができた。

山岸が手を真っ赤に染めながら二人をギロリと睨むと、今度はナイフを隠さないまま結界に向かって歩き出した。

「ひゃ、一一〇番を……」

ドコモ社員が携帯を取り出す。

「月夜野さんは山の中で殺されたのか……山岸さん、一体どうして……」
県職員がつぶやく。

このまま走って逃げ出すべきか、この中に留まっておくべきか。

ドコモ社員が恐怖のあまり駆け出そうとしたが、それを県職員が腕を掴んで止めた。

「山岸さんは登山のプロだ。逃げてもすぐに追いつかれる。この罫いを信じよう！」

精一杯の声でそうは言ったものの、自分も恐怖で震えが止まらなかった。

いよいよ山岸が結界に差し掛かったが、まるで壁にぶつかったかのようにその先に進む事はできなかった。

「くそお、なんてこんなところに!!」

山岸の低い声が広場に響き渡る。

「もしもし警察ですか!? 暴漢に襲われています! すでに二人が刺されて……」

「場所を伝えて!!」

「ば、場所は西沢渓谷の……ナレイ沢の脇にある広場で、そうですインフォメーションがある」

「電話はこのまま通話状態しておきます。は、早く来てください、早く……!!」

そうしている間にも山岸はゆっくりと結界の周りを回る。

どこかに隙間がないか探しているようだ。

「どこだ？ どこにある？」

その声は、聞いたこともない声だった。低くて、少ししゃがれていて……女のようにも男のようにも聞こえる。

「殺してやる。必ず殺してやる」

山岸は境界のあらゆる場所に手をかけたりして、なんとか中に入ろうとした。

しかしちあらの作った境界は強固だった。

境界を支えている四本の柱はただ木とベンチにビニール紐で括り付けてあるだけなのだが、そもそも山岸が柱に触れることはできないようだった。

そんな大惨事が起きている事も知らず、ちあらは枯れ葉の上に倒れたまま回復を待っていた。あらぬ方向に曲がっていた両足はほぼまっすぐになり、背骨が修復されるとともに脊髄が接続され、次々と下半身からのデータも送られるようになった。砕けた肩や肋骨、骨盤はまだ時間がかかりそうだ。

ようやく首を動かして、瞬きもできるようになった。

それまでよだれも涙も流れっぱなしだったのだ。

ふと何かを握ったままだったことに気付いた。それは……あの山岸に切られたザイルだった。自嘲がこみ上げる。落ち行く自分は相当必死だったのだろう。「落下する者切れたザイルをもつかむ」などという言葉がちあらの脳裏を過った。

落ちてからどれくらい時間が経っただろうか？

細ほそかった呼吸も胸が上下するくらいにまでは回復した。

あともう少し。立てるようになれば治癒の呪文が使える。そうすれば怪我は一気に治せる。あともう少し……と思った矢先、枯れ葉を踏み締めて何かが近づいてきていることに気づいた。

その足音から四足歩行であることはわかる。しかも体重はかなりある、というか踏みしめている足がかなり大きい。ということは蹄ひづめを持つシカではなさそうだ。

ちあらはゆっくりだがなんとか音のする方へ首を向けた。

音は次第に近づいてきている。

ちあらはその姿が見えるまで、視線を外さなかった。

すると、のっそりと大きなツキノワグマが現れた。

かなり大きい。ヒグマくらいあるだろうか？

ちあらと目があうと、クマはそのままためらわずに近づくと、ちあらに背を向けてからドツカと腰を下ろした。

どうやらちあらを襲う気はないようだ。

『てっきり死んでるかと思ったが……まさか生きていたとは』

そしてそんな声が届く。

「言葉が、話せるの？」

『人との関わりはあまりないが……少しは』

「いつから見ていたの？」

『何かが不自然に落ちていくのが見えたから、そのときからだ』

「そう」

それからちあらは首を正面に向けると、目を閉じた。

「油断してしまった」

そしてそうつぶやいた。

登山という慣れない状況が、ちあらはの精神の余裕を奪った。

山岸が憑依されることなど解っていたはずだ。今までにも僧とタクシーの運転手が憑依されたてはな
いか。さらに自分を監視する魔の目があることも知っていたはずだ。中央線の中で自分を見つめる
大きな眼球を見たではないか。
ワイザーズ・アイン

『登山とは神の御身体ごしんたいに登ることと同義だ。したがって全身全霊をかけて登らねばならない。登山とは
儀式と言えるだろう』

「……」

『つまりおまえは油断したのではなく、神の身体に登ることに全力を尽くしていたのだ』
「確かに登ることで精一杯だった」

とはいえ今こうして鎖場から落とされ、身動きさえ取れなくなったのは事実だ。

『ふむ、こういう状況を表す言葉を、人間が話しているのを聞いたことがある』

「なに？」

『注意一秒、けが一生』

ちがうとちあらは心の中で突っ込んだ。

『ここは我らの領域だ。怪我が治ったら、さっさと出て行くことだ』

どうやらクマはこの場所に人がいることが気に入らないようだった。クマからしてみればあれだけ高いところから落ちたのだから、死んでいると思っただけであらに近づいたのだろう。

「出て行きたくても登山道がどこにあるかわからない」

『そこまでは案内しよう』

そう言って、クマは腰を上げると歩き出そうとした。

「ま、まだ動けない」

『早く治すのだ』

「この一帯を焼き払っていいなら、すぐ治る」

『そんなことをしてみろ、すぐさま食ってやる』

「わ、わたしは美味しくない」

『同意。確かにおまえは肉も少なくて不味そうだ』

がーん。

そうはつきり言われると悲しくなるのは何故だろう……別に食われたわけではないのに。

『そうだ、ゴミを拾っておいた』

どこに隠し持っていたのか、クマはちあらのリュックをちあらのそばに放り投げた。

「あ、ありがと……」

とはいえ、リュックもボロボロだ。クマがゴミと呼んだのも領ける。中にはタブレット端末やお弁当が入っているのだが、無事ではないだろう。そういえばスマートフォンはと思い、ウエストポーチをまさぐるとこちらは身体についたままだった。もっとも中身が無事かは解らないが。

さらに刀がないことにも気付く。

『これもだ』

それを察したのか、今度はちあらがぶつかった木に触れると、上の方から打刀と脇差しがドサドサッと落ちてきた。

「はえ〜」

どういう仕組みか解らず、しばしちあらは樹を見上げていた。

「ありがと」

それから礼を言うと、ようやく上半身を起こした。

* * *

広場では山岸とのにらみ合いが続いていた。

山岸はひとしきりちあらの作った聖域の間隙を探ったが、見つけられず、齒軋はぎしりした。

『今から向かっている警察官に電話させますから、一旦電話を切ります。すぐにかかるので、必ず出てください』

「は、はい……お願いします」

電話が切れるのが心細いと感じながらも、ドコモ社員は電話をいったん切った。

山岸は一度聖域から離れると、自分のリュックの所に戻り、着火剤とランタン用の油を取り出した。

「あ………！」

「この囲いごと燃やす気だ……」

「こんなに枯れ葉が積もっているのに、山火事にでもなったらただでは済まないのに……」

「あの山岸さんは、たぶん、山岸さんじゃない……」

「え？ どういうことですか？」

「うまく言えないけど……」

県職員は確信していた。壺はいるのだ、と。

もはや疑いの余地はない。だが、それをうまく説明する言葉を持ち合わせてはいなかった。

万事休す。

もうこうなったらこの囲いからダッシュで逃げ出すしかないのか。

二人がそう身構えたときだった。遠くの方からサイレンの音が聞こえてくる。しかもたくさんの。

「はい……！」

「間に合ってくれ……！」

二人は祈るように声を振り絞った。

まずは近くの派出所にいた警察官二人とさらに救急隊が駐車場に到着したことを知らされた。

「た、たいへんです……火を、火をつけようとして……！」

『今、向かっています！』

携帯電話の向こうの声も鼻息が荒い。走っているのだろう。

「チィ……！」

山岸は撒いていた油瓶を放り投げ、登山道の中へと早足で消えていった。

程なくすると警棒を抜いた二人の警官が掛けてくるのが見える。

その後ろに二人一組で担架を担いだ救急隊員が四人。

その姿に、県職員とドコモ社員はホツとしてへたり込んだ。

「大丈夫ですか？」

警官が駆け寄る。

救急隊員は倒れてる二人の元へ。

「暴漢は？」

「山の方に逃げていきました」

「わかりました」

「暴漢は逃走、繰り返す、暴漢は逃走」

無線で連絡しながら、警官二人は登山道に続く道を塞ぐように立ちはだかった。

「お二人に怪我はないですか？」

「だ、大丈夫です。我々は無傷です。ですが同僚が……」

「解っています、あとは我々に任せて、心を落ち着かせてください」

すでに救急隊員が蘇生を試みている。

そうこうしているうちに警察署からの捜査員たちも続々と到着した。警察官のみならず、機動捜査隊に鑑識に刑事に……広場は瞬く間に捜査関係者でごった返した。

「どうも、日下部警察署刑事課の近藤です。こっちは機捜（機動捜査隊）の君島」

「よろしく」

何人かの部下を従えて刑事らしき人物が県職員に警察手帳を見せながら話しかけてきた。

「急を要する事態ですので、手短に状況を教えてください」

「襲ってきた男は顔見知りと言うことで間違いないですね？」

「はい、山岳会のメンバーで県でも何度かお世話になったことがありますし……まさかこんなことになるなんて」

「容姿のわかるものはありますか？」

「写真とかはちよつとないですね……歳は六五歳で身長は一七五cmくらい、少し細身ですが筋肉質です。山にはかなり詳しいので気をつけてください」

「今、山岸と同じ猟友会の者が協力をしてくれるとのことのでこちらに向かっているそうです」

別の捜査員が携帯電話で会話しながら、そんな一言を挟む。

「それは心強いな」

「相手は凶器を持っている上に山に詳しい、一班五人制であたってくれ」

言ってるそばから、けたたましいドローンのローター音が響きはじめる。

さらに警察犬部隊も到着した。

「刑事さん、山岸さんと一緒に山に入った女の子がいるんです。もしかしたらその子も……」

「背格好のわかるものはありますか？」

「はい」

県職員はタブレット端末で撮影したちあらの写真を捜査員に見せた。

「これはお被いをしてもらった時の写真なんです、今日は普通に私服です。この銀髪が目立つと思うので他人と間違うことはないかと」

「なるほど」

一方、山岸に切られた二人の応急処置は早々に終わりを告げた。おびただしい量の出血をみれば絶望的なのは誰が見ても明らかだった。すでに心肺は停止しており、瞳孔反射も起きなかった。

「布施さん……!」

救急隊員が二人の目を閉じるを目の当たりにして、残された県職員は身体を震わせる。

この騒ぎは登山道へと向かっているクマの耳にも届いてた。

『山が騒がしい……』

クマは少し不満そうに言うと、立ち止まった。

そして臭いをかぐように鼻をクンクンとならした。

『おまえを探しているのかもしれない』

「わたしを？」

『数十人はいる』

クマは目を細めると、音のする方向に向き直った。

「そんなに……」

何かあったのだろうか？

『おまえを探しているとなると、人間どもが我らのテリトリーに入ってくるかもしれない』

クマはそう言うと、背中に乗せていたちあらをばいっと地面に落とした。

「わわわ……！」

斜面だったので危うく転がりそうになるが、後ろ向きにでんぐり返ってゴツンと木の幹に後頭部をぶつけて止まる。

『沢の音が聞こえるか？』

「き、聞こえる」

『その沢は登山道と交わっている。深いところはないから、沢を下っていけ』

クマはそういうと、密集した木々の中をまるで何もないかのように駆け抜けて行ってしまった。そういえば自分を乗せていたときも、けっこうな速度で進んでいたような……とか思う。

クマが去った方向をしばらく見送ってから、ちあらは水の流れる音を頼りに斜面を樹木伝いに下りていくと、次第に水の音は大きくなり、幅一mほどの沢に出た……のだが、当然ながら人が歩くことは考慮されていない。

水はかなり冷たく、倒木、ゴツゴツとした石や岩が続く。

ただありがたいことに方角に迷うことはなかった。下流に向かって進めば良いのだ。

一〇分も進むと登山道が沢に沿って並行している場所に出られた。

「おー」

ちあらは登山道によじ登り、駆け下りる。

たしかに下方が騒がしい。

ドローンのローターの音が次第に鮮明になる。近づいている証拠だ。

下の方の木々の間から人の姿が見えた。しかも一人や二人ではない。

胸騒ぎがする。

鳥たちがたくさんの人間が山に入ったこと、犬を連れてくる事を教えてくれた。

さらに下っていくと山道が開け、登山道が沢の河原と共有する場所で捜査員たちと遭遇した。

「あ！」

向こうもちあらを発見して、ザバザバと沢を渡ってくる。

「もしかして月夜野さん？」

そしてちあらの名前も知っていた。どうやらクマの予想は当たっていたようだ。

「コク」

「よかった！無事で……はないようですね」

捜査員はちあらの姿を見て、慌てて支えようとした。

そこでちあらは初めて自分の姿を意識した。服はボロボロだし、下半身は血まみれだ。

「大丈夫、ちゃんと歩ける」

その場で腕を振ったり足踏みしたりしてみせる。

捜査員たちは、じゃあその服に染み込みまくっている血はなんなんだと思ったことだろう。しかも返

り血ではなく、どう見ても内側からの出血にしか見えない。

「行方不明の少女を保護しました。月夜野ちあらさんと確認。ええ、例の銀髪の女の子です」
 捜査員の一人がちあらが渡した学生証を確認しながら無線連絡する。

「一緒に山を登った山岸がどこに行っただかは見ていないか？」

他の捜査員がちあらに山岸の消息を尋ねてきた。

「え、山岸を探しているの？」

ちあらの予想では自分を落としたあと、正気に戻っているはずだった。それが雄鶏山の目的だと思っ
 たからだ。もしまだ取り憑かれたままだとしたら……。

「そうだ。どのあたりではぐれた？」

「彼が、なにかしたの？」

「……」

捜査員たちが一瞬間を見合わせたあと、二人を刺して逃走中であることを告げた。

不味い展開だとちあらは心の中で舌打ちする。山岸は取り憑かれただけであり、彼が自分を落とした
 ことにしたくはなかったのだ。

「で、山岸とはどこで？」

「鎖場ではぐれてしまった」

ちあらは切断されたザイルを捜査員に手渡す。その断面は鋭利なモノで切断されていた。

「あなたを落とした？」

「コク。わたしが気がついた時には彼の姿はなかった」

「よく無事だったな……」

「岩じゃなくて木の上に落ちたから助かった。運が良かった」と言うことにする。

「そうか、となると山岸と別れたのは下山する前か……」

「ヤツは広場に一度戻っているから……」

などと相談を始める捜査員たち。

「途中で出会ったりしてもない？」

「コク」

「近藤警部、月夜野さんは山岸とは山頂付近ではぐれたと、ええ、はい、それからは見ていないと捜査員の一人が無線でちあらの話した情報を報告する。

「小宮山、おまえが広場まで月夜野さんに付き添ってあげてくれ」

「了解しました」

「深追いしてはいけない。わたしと一緒にいったん広場に戻って欲しい」

ちあらはリーダーらしき人の腕をとって、首を左右に振った。

「大丈夫だ、私たちはちゃんと訓練を受けているし、凶悪犯を捜索することにも慣れてるんだ」

まあ、そう反応されてしまうか。

ちあらは奥に進むという四人に、プロテクション・フロム・イビル 邪悪から守る術をかけた。もっとも雄鷄山の力が強ければ意味はないが……何もしないよりマシだろう。

「おまじない」

ちあらはそういうと、四人を送り出した。

* * *

ちあらが広場に戻ると山岸の搜索に捜査員のほとんどが出払ってしまったためか、だいぶ寂しくなっていた。残っているのは救急隊員と鑑識、現場を指揮する刑事と通信係や機器をモニターしている署員ぐらいだった。

いつの間にかパイプテントが設置され、急ごしらえの捜査本部ができあがっていた。

救急隊員が横たわった県職員とドコモ社員のそばで何かを書いている。おそらく死亡に関する書類だろうとちあらはすぐに悟った。もし生きていたらこんなところで悠長にしていけないからだ。

ちあらはすかさずその横たわっている二人に駆け寄る。

「あ！ちよ、ちよっと！」

制止する救急隊員を押しのとけると、遺体に触れ、蘇生が可能か調べるが、すでに魂は抜き取られたあどだった。雄鷄山が抜いたのだろう。生き返らせるには魂を取り返さなければならない。

「あ、月夜野さん」

ずっとうつむいて座っていた県職員が、顔を上げた。

「無事だったのか……よかった」

そういつて少し安心したような表情をした。

同僚の死を知って放心状態だったのだが、ちあらの声を聞いて我に返ったらしい。ちあらが無事だったことに安堵したようだった。

「いや、無事ではなかったみたいだけど……」

服が血だらけなのに気付いて、表情を曇らせる。

「わたしは平気。だけれど、山岸が乗っ取られるのを阻止できなかった」

「やっぱり……あれは山岸さんではなかったのか」

「コク」

「だけど……そんなこと警察は信じてくれるだろうか……」

県職員は元気のない表情のまま、捜査員や救急隊員たちを見渡した。

もし自分が岩場から落とされた時、山岸も道連れにしていればここでの惨劇は起こらなかっただろう。しかし、そんな判断はできない。あくまでも山岸は乗っ取られていただけであり、そんな彼を勝手に死に追いやる理由もない。

でも……その結果、二人が殺されてしまった。

いや、命の足し引きはよくない……。

いろんな思いがちあらの中で浮かんで消える。

「現場を指揮している人に会いたい」

事件は現在進行中だ。とにかく事態を收拾しなければ。

ちあらは立ち上がって広場をぐるっと見回した。

すると、ちょうど自分を指さしながらこちらに向かつて来る人物に目がとまった。

「警部、あの子が山岸と一緒に登山に向かった子です」

「無事で良かった」

そんな会話をしながら刑事課の近藤がちあらに近づいてくる。

「あなたが指揮官？」

ちあらは近藤が口を開くよりも前に声をかけた。

「そうだが」

「山に入った人たちを今直ぐに呼び戻して欲しい。事態は一刻を争う」

向こうが何か言いたげなのを無理に遮って言葉を続ける。

「ご心配ありがとうございます。だが大丈夫だ、我々だって素人じゃない。凶悪犯罪者を追うことのイロハは心得ている」

「それは百も承知している。けれどわたしの言葉を信じてほしい。この山はすでに人ではない者が支配

している」

「まあまあ、落ち着きなさい。けがの方は大丈夫なのか？」

言い合っているそばから登山道の方から冷たい風が入り始めていることにちあらは気付いた。それはまさに冷気。

「？」

ちあらはその風の音に耳をそばだてた。風の音に混じって、かすかな音が聞こえたのだ。

『琴？』

思わせぶりな、それでいて悲しげな音階が風の音に混じっている。

どういふことかわからず、ちあらが心が騒ぐ。

次は何をしてくる気だ？ 何の準備をすればいい??

ちあらは近藤と言ひ合いをしながらも、雄鷄山の次の手を一生懸命考えた。

「とにかく、現場は我々に任せてもらいたい。だいたいキミは一般人だろう？」

と言ったところで、近藤の言葉が切れた。

目を見開き、口をパクパクとさせている。

「うわあああああ！」

同時にちあらその後ろから叫び声が響いた。

ちあらもそれに気付いて振り返る。

近藤の視線の先では……地面に横たわっていたはずの死体が動き出し、救急隊員に襲いかかったところだった。

ソツンビ
そつちで来たか……と、ちあらは内心舌打ちする。

「下がって！」

ちあらはとっさに死者を葬^グり去る術^{グ・アンデッド}を使おうとしたが、慌てて止めた。ちあらはの退魔の術は死者を一瞬で灰にしてしまう。そうなったら魂を取り戻しても、蘇生がさらに面倒なことになる。

ちあらは出かけた呪文を飲み込むと、死者の動き^{ホイルド・アンデッド}を止める術に切り替え、二体の動きを止めた。

ゴツ!!!

その瞬間、山の方から猛烈な冷気が吹き込んだ。悲鳴のような風切り音が広場に吹き荒れる。身を切り裂くような冷たく鋭い風だ。同時に荒れ狂うようなけたたましい琴の音が風と共に広場に鳴り響いた。

「結界に入って!!」

ちあらははまだ固まっている近藤をぐいぐいと押した。

「な、何を……」

「いいから！あの結界の中に！」

すでに県職員とドコモ社員が飛び込んでいる。

ゴオツツという音とともにさらに強い冷気が広場の中を吹き荒れる。その強烈な風音とともに、金切り声のような不気味な音が響き渡ると、それを聞いた者達は恐怖のあまり顔を歪め、叫び声をあげて

狂ったように逃げ惑い始めた。

「あーあ」

「おい！ どうしたんだ!? お前ら勝手な行動は許さん!!」

近藤が結果から飛び出そうとしたが、それをちあらがとっさに足払いでこかす。

「うお!!」

「ここから出たら、あの人たちと同じ目に遭う。風が収まるまで、待って」

「……………」

結界の外では尻餅を置いて失禁する者、叫び声を上げて駆け出す者、嘔吐する者……警察官も消防隊員も鑑識も、皆が皆まるで狂ったように叫びだし、逃げ出し始めた。

「な、なんだ……!! 何が起きているんだ!?!」

しめ縄の中にいた近藤は尻餅をついた体勢のまま、我が目を疑った。

ちあらは自分の近くでしゃがみ込んで震えている警官に近づくと、邪悪から守る術を施し、恐怖の呪いを解く術をかけると、彼の目の前で手を振って意識を確かめた。

「あ、ああああ……あ、あれ?」

警察官はすぐさま正気を取り戻す。

「とりあえず、あの二人を拘束して」

ちあらは警官の肩を叩くと、立ち上がったまま微動だにしない二体のゾンビを指さした。

「ええ!？」

「じゃないと、そのうちまた動き出す」

「まじか!」

警察官は手錠を取り出すと勇気を振り絞って死体に向かった。

「あなたもお願い」

ちあらはもう一人、恐怖で動けなくなっていた捜査員にも同じ術を施す。

「で、出ても大丈夫なのか?」

それを見ていた近藤が結界の中からちあらに声をかける。

「まだ出てはいけない。この冷気を止める」

ちあらは広場から登山道に続く道の入り口に立って何やら呪文を二、三となえるとようやく風がヒタリとやんだ。あの琴の音も。

静寂が広場に訪れる。

「出ても大丈夫」

そして近藤に向き直ると、深く頷いた。

彼は恐る恐る結界から出ると、キョロキョロと辺りを見渡した。

「……………」

そしてどうしたらいいのか困惑した。

「広場でこの有様。山に入った人たちがどうなっているか……命の保証はない」
ちあらは首を左右に振って下唇を噛んだ。

「なんだ?!」

近藤は我に返ってテントにある無線機に駆けると、山に入った捜査員たちを順番にコールしたが、どの班からも返事がなかった。

「な、なんてことだ……」

近藤は焦りと絶望からうなだれるが……。

『ザツ……こちら第三班、リーダー山本です。本部、どうしました?』

ちあらにも聞き覚えのある声が返ってきた。下山途中に遭遇した班だ。ちあらがかけた守護の術は、どうやら雄鷄山に対して有効だったようだ。

「状況が変わった、今すぐ広場に戻ってくれ。詳細は戻ったら説明する」

『えー、第三班了解、帰還します』

その声を聞いて、近藤が少し安堵する。しかし、応答があったのはその班だけだった。

「とにかくこの広場は危険。駐車場がある旧道まで引き上げて」

ちあらは言葉に、初めて近藤は大きく頷いた。

五、魂の往く先

「幽霊って、本当にいるんだな……」

結界を作る手伝いをしながら、県職員はため息交じりにそうつぶやいた。

「どうだろ……」

「え……」

「触れずに一生を終える人がほとんどだと思う」

ちあらは竹を杉の木に結びつけながら、そう答えた。

確かに、幽霊に触れる機会がなければ、存在しないも同義だ。

「そういうものかな」

「それに」

「？」

「ここまで積極的に関与してくる霊は珍しいと思う」

「そうなんだ？」

「もし、あらゆる霊がこんなに積極的なら……たぶん、人はみんな霊を信じてると思う」

「なるほど……」

「つまり」

「？」

「今回はただの霊なんかじゃない」

「え？」

ちあらは県職員に作ってもらった石を積み重ねた祭壇に神棚を置くと結界を張り直した。

これで登山道入り口は完全に靈的に封鎖された。

術が終わって振り返ると、周囲は緊急車両の回転灯の光につつまれていた。その赤い光の中を、遽しく捜査員や警察官達が行き来している。狭い旧道は、ほぼ捜査車両と緊急車両で埋め尽くされていた。

日は暮れ始めており、回転灯の赤い光が一層強く感じられる。

「トランクを開けてほしい」

ちあらは県の車の後ろに回ると、バックドアに手をかけた。

「あ、ああ」

県職員も荷室にちあららの荷物がもう一つ残っていることを思い出す。

「そのバッグには何が入ってるんだ？」

そう問う県職員に答える代わりに、ちあらは無言のままバッグのヒモを緩め、中を見せた。

「あ……」

中に入っていたのは、巫女装束だった。

「着替える」

そしてそうとだけ言うと、後部座席に乗り込み、ボタンとドアを閉めてしまった。

「あ、ああ、ごめん」

県職員が車を背を向けた。

ちあらの巫女装束はマジックアイテムである。着る者を保護する様々な魔法がかけられている。ならば最初から巫女装束で登山すればよかったしちあらもそうしたかったのだが、残念ながらこの服は登山に向いていない。足は高く上げられないし、袖は巨大で木々に引っかかるし、リュックが背負えない。ポロポロになった血だらけの服を脱ぎながら、ため息をつく。

「高かったのに……」

ちあらは残念そうに巫女装束の入っていたバッグに、脱いだ服を詰め込んだ。

着替えを終えて外に出ると、県職員にタブレット端末を借りた。

「遺体の位置を記録するのに使う。わたしのは壊れてしまった」

「なるほど。えーと、ロックの外し方は……」

それから近藤の元へ。

一方の近藤は遽しく部下にあれこれと指令を出していた。

「登山道の封鎖は終わったか？」

「国師こくしがたけヶ岳ルート、甲武信小屋ルート、それぞれ封鎖完了しました」

「連絡がついた捜査員たちは、その場にとどまるように伝えて」

「ちあらがそのやりとりの中に割って入る。」

「しかし、中に我々はいれないのだろうか？」

「わたしが直接迎えに行く。あなたたちは広場から逃走した人たちを捜索して保護してほしい。今頃正気に戻ってるはず」

広場で冷気に当てられて職場放棄した捜査員や警察官は恐怖フイアリの術にかかってしまっただけだ。術が解ければ元に戻る。ただ逃がっている間に川や谷に落ちたりしている可能性もあるが……。

「山の中の捜索はわたしにまかせてほしい」

「もとより行方不明者の捜索は得意だ。」

「わかった、今回は君を信じよう」

「ありがとう」

「ちあらはそういうと、右掌を近藤の前に差し出した。」

「？」

「無線機を貸して欲しい」

「あ、ああ、そうだったな」

近藤は部下に予備を一台持って来させると、ちゃんと使えることを確認してちあらに渡した。

「行ってくる」

ちあらはさっさと向き直ると、明かりも持たずに登山道の中に消えていった。

「あの子は何者なんだ？」

近藤が消えゆくちあらの背中を見つめながら、ため息交じりにつぶやいた

「何者なんでしょうね……」

そばにいた県職員も肩をすくめる。

「山梨県は知っててあの子を連れてきたのではないのか？」

「元々、地鎮祭を依頼する程度のことだったんです」

霊の存在なんて誰も信じていなかった。あの魔のカーブの除霊を依頼したのは、事故を防ぐためのあらゆる手段のただの一つであり、気休め程度のものだったはずだ。

「それが、こんなことになるなんて……」

「私も、こんな事件は初めてだよ……正直、関わりたくなかったね」

* * *

広場へと続く道はすっかり暗くなっていた。時刻は一六時過ぎ。

ちあらは木々とコミュニケーションをとりながら、まずは広場に向かった。

捜査員は五人一組で七班に分かれて山に入ったらしい。つまり合計三五名だ。その内、ちあらの守護によって生還した班があるので、残りは三〇名。警察犬部隊はたくさん沢に阻まれ追跡があまりできなかったらしく、早々に引き上げたらしい。

ちあらは木々の持つグリッド状の情報網を駆使して彼らの居場所を突き止める。

これは魔法ではあるが、呼応する木々までもが魔法を使っているわけではない。

木々たちは常に互いにコミュニケーションをとっていて、例えば害虫にやられればその情報を他の木に伝えるし、害虫に対抗するための毒素や酵素の情報を共有する。そして当然、どの木がやられたかの位置情報も。ちあらはそれらを読み取っているのだ。

森は人間の数はちあらを含めて三二と伝えて来た。これは捜査員三〇名にちあらと山岸を加えた数だろう。そして他に登山者はいないことも解った。

「いむ」

これも木々が三二という数字を返すわけではなく、そばに人がいると返してきた木の情報を元に集計はちあら自身が行う。

内訳は死亡が五、生きているが動けない者が八、軽症・無傷が一九。

死亡の内容はショック死が一、出血多量や脳挫傷などの外傷性ショックが二、頸部圧迫が一、溺死が一、外傷性ショックと溺死は滑落したためと予想される。ショック死は恐怖に耐えられずに死亡。頸部圧迫はとある樹木から重要な情報が届いた。自分の枝にぶら下がっている、と。

などと情報をまとめていると、死亡が一増えた。重傷者が一人息を引き取ったようだ。

一人死亡したことを知って、ちあらは慌てて近くの木によじ登った。

巫女装束なので登るのに苦労したが、木が枝でサポートしてくれた。

なんとか空が見える場所に……と思ったのだが、ちあらが選んだ木は決して高い木ではなく、枝葉の隙間からわずかに天に昇る光の筋が確認できただけだった。雄鶏山が魂を引き上げた瞬間だった。雄鶏山のどこかに向かったのだろうとちあらは思った。

広場に到着すると、大きな影がど真ん中にデーンと座っているのが見える。

あのツキノワグマである。

『まったく、騒がしくてかなわぬ』

クマはちあらの姿を認めると、のっそりと歩み寄って不機嫌そうな声を上げた。

『迷惑をかけてすまない』

『人はもつと山を尊ぶべきだ』

クマはそういうとフンと鼻を鳴らす。

『山に入った人たちをあなたたちの領域から出すために、協力してほしい』

『いつもなら人間など相手にしないのだが……お前には私から近づいてしまった以上、この件が片付くまでは協力しよう』

『ありがとう、終わったらちゃんとお供えする』

『私は人の祈りは聞かぬ。供え物に意味はない』

「むむ」

『死んだ者をくれるというなら、喜んで受け取るが?』

『それは自然に任せたい。もしわたしたちが見つけれなかったら、あなたのものになる』

『よい判断だ』

「とりあえず重症者から助けたい」

『場所はわかっているのか?』

ちあらは近くの木に触れて、自分が木々とコミュニケーションがとれることを示した。

『巫女というのは、伊達ではないようだな』

クマは片目を見開いて驚いた。

「かつて人も自然とコミュニケーションを取っていたと聞くけど……」

『人もまた動物だからな』

クマはそう言うのと四つ足で立ち上がり、ちあらを背中に乗るように促した。

「ありがと」

ちあらはその言葉が終わらないうちにクマはちあらを乗せて山の中へと入っていく。

木々の中をすり抜けるように移動するクマの能力は、山に入った捜査員たちの場所に直ぐに駆けつけることが出来た。

ただ、クマの姿を見られては誤解される。近くまで来たらクマから下り、ちあら単独で遭難者の場所へと向かうのだが、コレはコレで実はホラーだった。なにせちあらは明かりを持たずに山に入った。暗闇でもものが見える術が使えるからだ。

なので、捜査員たちからしたらどこからともなく枯れ葉を踏みしめる足音が聞こえ、次第に自分たちと交信する無線の音が聞こえ、足音がすぐ側まで来たかと思ったら木々の影からいきなり目の前に巫女が現れるのだ。

「迎えに来た」

「うわあ…！」

突然現れた少女の姿に、幽霊でも出たかと言うような表情をする。

「あ、迎えに来たというのはそう言う意味ではなくて……救助に来た」

「そ、それはありがたいが……あなた一人でどうやって……」

「怪我を治す」

「え？」

言うが早いのか、ちあらは捜査員の折れてる足に触れて治癒の呪文を唱える。

ほんの一、二分の出来事だ。

「もう立てる」

その言葉に疑問を持ちながらも、痛みは消えているので恐る恐る立ち上がる。

確實に足が折れていていたはずなのに……何の痛みもなかった。

「嘘みたいだ……」

捜査員は驚いて地面を何度も踏みしめた。

「登山道まで案内するから、自分の班と合流して欲しい」

本来なら一人一人付き添って近藤たちの待つ旧道まで帰すべきのだが、そんなことをしていたら時間がかかりすぎるし、こうしている間にも命を落としてしまう重傷者もいるかもしれない。

それに、ちあらは雄鶏山のなんというのだろうか、意思というか、そういうものが少し垣間見えたような気がしていた。というのも雄鶏山がまだ魂を渴望しているなら、山に入った捜査員たちは全滅していたはずだからだ。しかし、魂をとったのは事故死した者のみである。

ここになにか意味があるとかあらは思ったのである。これ以上殺すことはおそくない。

もちろん念のために魔から守護する術はかけておくが……。

「が、が、がが……」

『どうした?』

クマが困惑するちあらは顔をのぞき込む。

「弾切れ……」

神から与えられている呪文の数は決まっている。さらに毎朝何の呪文を何回使うかを神に誓願しておかなければならない。ちあらはの予定では、守護すべき人間は自分と県職員の二人と案内役の山岸だけ

だったので、あまり守護の呪文をとっていなかったのだ。

『おまえの神は、融通がきかないのか?』

「わたしの力は神が決めている。術が切れるのもまた、神の意志」

『おまえが死に直面したときに、術が切れたら?』

「神がわたしを死に渡されたのだと思う。わたしの死は、神が決める」

『その志は素晴らしいが、死を前にしてその志のまままでいられるのか?』

「大声で泣いて喚き散らし、歯ぎしりし、命乞いする」

『フン、正直だな』

「人間、きれいな事が言えるのは、心に余裕があるときだけ」

* * *

ちあらが最後に向かった場所は登山道からもっとも離れた、自然林に閉ざされた場所だった。沢の水源となっているようで、あちこちから湧き水がしみ出し、それが集まって小さな泉を形成していた。

その泉が見下ろせる、少し斜面を登ったところに一人の男がぶら下がって死んでいた。山岸であった。

雄鷄山に乗っ取られても、その間の記憶は失われない。

憑依の術が解け、我に返ったとき……彼にはどうすることもできない事実だけが残った。

その決着を自分の手でつけるには、死を選ぶしかなかったのかもしれない。

「下ろすの手伝って」

ちあらはクマに山岸の遺体を支えてもらいながら木から下ろすと、静かに寝かせた。

山岸の表情は穏やかに見えた。なんの怨念も無念も感じ取れない。

普通の人間なら、この状況を恨み悔やみ、そして苦しんだはずだ。

ちあらには死者（ヒトク・ウイズ・ザ・デッド）と会話するという術があるのだが、魂は抜かれてるため、その術は使えない。

「……」

『彼がこの場所に何度かきていたのを私は見たことがある』

するとクマが山岸の死体に近寄り、軽く頬ずりした。懐かしむように目を細める。

『この場所は我らのテリトリーだが、彼はそれをよく解っていたように思う。彼は山を敬い、動植物を

愛していた。彼がこの場所にいる時、彼は我らの一員だったのだ』

「あなたでも人を信頼することがある？」

『かつてお前たちに「自然」という概念はなかった。お前たちもまた自然の中の一員だと自覚していた

からだ。自然と人間を区別するようになったのは最近のことだ』

「なるほど……」

クマとの話を聞いていて、この山岸の遺体は神のものになったのだなど、なんとなく思った。彼の遺

体が発見されることは、ないのだろう、と。

* * *

近藤たちの待つ旧道にちあらが戻ったのは、午前零時を過ぎてからだだった。負傷者を含め二五名が生還することが出来た。

一方、遺体は現地に残したままだ。遺体を運ぶ力をちあらが持ち合わせていないからだが、その代わりGPSで場所を地図にマークしておいた。

「このアドレスにアクセスすれば遺体の場所がわかる」

グーグルマップのマイマップに登録してあるアドレスを近藤に伝えた。ポイントされた地点には写真も投稿されており、遺体や周囲の状況が確認できるようになっていた。

「すごいな」

「今の科学は魔法のよう」

「今日のところは……ここまでか」

「遺体の収容は任せた」

「全部で……六、いや……八か……」

山岸に直接殺害された県職員とドコモ職員も、広場に残したままだ。

ただ、事件はこれで終わりと言えば終わりだった。なぜなら事件を起こした山岸は自殺し、捜査員達
は不慮の事故ということで説明がついてしまうからだ。雄鷄山の要素は一つもない。

もちろん、捜査員や県職員には疑問がたくさん残るだろうが……追求したくもないだろう。

「事件の公表に関しては警察庁と協議して欲しい。○案件って言えば警察庁が公表すべき内容を教えてくれるはず」

「なんだそれは？」

「警察にもこういう不可解な事件を扱うところがあるみたい」

「聞いたこともないが？」

「減多に無いからだと思う。わたしは確かに伝えた」

「ちあらは念押しの意味も込めて、近藤のそばにいた機動捜査隊の君島の方にも目配せする。」

「こちらでも確認しておく」

「近藤は部下にメモをとらせながらもついでにちあらの連絡先も確認した。」

「事情聴取は受けてもらうからな」

「解っている」

「明日の段取りが大まかに決まったところで、ようやく撤収となった。」

「近藤を始め、続々と緊急車両が去って行く。」

「本来なら封鎖した道路には警察官を残さなければならぬのだが……誰もやりたがらないだろうな」

とちあらは内心苦笑した。

最後に近藤がパトカーに乗り込むのを見届けてから、再び山の中へと入った。なんとかして雄鷄山の正体を突き止めたい。

ちあらはクマの場所まで戻ると、今度は雄鷄山山頂へ連れて行くよう頼んだ。

『タクシー扱いだな』

クマは不機嫌そうにフンと鼻を鳴らす。

「この件は、まだ終わっていない。だからあなたはわたしの前に姿を現している」

『よくわかってるな』

クマは少し仕方なさそうにしながらも、ちあらを山頂へと連れて行った。

時刻は午前二時。

そして、そこで待っていたものは……満天の星空と澄んだ空気だった。

霊の痕跡も神のような意識の存在もない。ただただ星明かりに照らされた山々の光景が広がっているだけだった。

「えー……」

命をかけてまで目指した雄鷄山の山頂は、神の痕跡どころか霊の残滓すらない。

そんなバカなとちあらは残っている感知系の呪文をフル稼働させるが……自分とそしてクマの存在を指し示すだけ。いや、全くないわけではない。鎖場の根元の方では、滑落死した薄い地縛霊がちらほら

いたりするものの、他はなしのつぶてだった。

「今、この山に神はわたしだけだ。改めて探す必要はあるまい？」

クマにそう言われて、ちあらは我に帰った。

「あ……」

そして、大轟山三津窪神社の神が暗示してきた白無地の意味を理解した。

雄鶏山は「潔白」だったのだ。

そして雄鶏山の神というなら、それはクマであると。つまりちあらの言っていることは間違っているというのを、三津窪神社の神は訴えただけなのだ。

「ふーむー」

だとしたら県道で除霊した時に感じた、あの殺意とも恨みとも取れるような強い視線は一体どこから来たものなのか？

山岸に取り憑き、殺人を犯したのは一体何者なのか？

「もう少し付き合って欲しい」

ちあらはクマの腕を引っ張ると、今度は除霊をしたあの県道のある方角を指さした。

『あそこ行くことにどれほどの価値があるというのか』

「現場百回と言う」

『……』

クマは呆れながらも、ちあらをあの魔のカーブの場所に連れて行った。

カーブの先端に立ち、雄鷄山の方を向いて意識を集中するも……やはりなにも感じない。

ちあらは改めて除霊したときの状況を思い出す。

奉書紙を広げ、呪文を唱え、炎に霊が飲み込まれていく。そのとき視線に気付いた。

誰かに見られているような感覚。そして殺意にも似た、憎悪の波動。

『その視線は、いつから感じていたのだ？』

クマがちあらの隣に来て、ちあらと同じ方角を見る。

「……」

「気付いたのは除霊中だったように思う」

『ならば地縛霊に何か起きたことに気付き、それを確かめるために意識を向けたのだろう。すると除霊するおまえの姿が見えた』

「そしてわたしに、憎悪の視線を向けた？」

『だろうな。地縛霊に異変があれば気付くことができたのだろう』

「な、なるほど……」

ここまでが限界なのかなと、ちあらはなんとなく思った。

雄鷄山は常に正体を隠し続けてきた。ちあらの前に姿を現すときは、必ず誰かに乗り移った状態だった。そしてそれが雄鷄山のやり方なのだろう。徹底的に正体を隠し、魂を奪うのも地縛霊にやらせる。

そうして長きにわたって、この場所に存在し続けてきたのではないか？

となると、ここでぼけーっと景色を眺めていても、解ることなど何も無いであろう。

「むう……」

次に雄鷄山の尻尾をつかめるとしたら……この辺りでまた死人が出るときか。

などと不謹慎なことを思う。

それから自分の隣にいる大きなクマを見上げる。

「あなたは雄鷄山の正体を知っている？」

『今度は神頼みか？』

クマが薄く笑った。

「この土地で起きたことなのだから、知らないはずがなと思う」

『神の縄張りテリトリーは、おまえが思っているよりも複雑だ』

「？」

『この山々は私の支配下にあるが、その中には人間が信仰する神々もまた、住んでいる』

確かに、あの大轟山三津窪神社も、このクマの支配地域テリトリーの中にある。

『何度も言うがわたしは人の神ではない。だから人の神はわたしのテリトリー内に存在できる』

「おー」

つまりクマは雄鷄山の正体を知っているのだ。そしてそれは人間と関わりのある存在なのだ。

『今回の件は我らのテリトリーを騒がせたから協力しているのであって、決着はおまえたちの手でつけるべきだ。そして私はどちらにも肩入れはしない』

「そう……」

もう、ちあらに打つ手はなかった。

雄鷄山は見事に正体を隠し通し、魂をまんまとせしめていった。

それにちあら自身も使える呪文が尽きかけている。これ以上雄鷄山と事を構えるのは得策ではない。

『いつまで眺めているつもりだ?』

「ぼけーっと雄鷄山の方に向かって立ち尽くしているちあらに、クマはいい加減いらだっているようだ。」

「ご、ごめんなさい」

そう言って振り返ろうとしたとき、一筋の流れ星が空を駆けていった。

澄んだ空にふさわしく、それでいて一瞬で消える、一条の儂い光。

「あ……」

そこでちあらは雄鷄山に魂が引き上げられた時のことを思い出した。

「そうだ、魂だ。」

魂の行き先には、その魂を引き寄せた者がいる。

『もう一度、山岸の元へ!』

ちあらはぐいぐいとクマの腕を引っ張ると、元来た方角を指さした。

* * *

ちあらは山岸の遺体が横たわる、あの泉の場所に降り立った。

『魂もないのに、何故ここへ来たかったのだ?』

クマが怪訝そうにちあらはの表情を伺った。

「魂の向かった方角を、記録するため」

ちあらは自分を納得させるように頷くと山岸が首を吊った木に語りかけ、山岸の魂が飛んでいった方向を尋ねた。すると木は魂が向かったのと同じ方向に伸びている枝を教えてくれた。

しかしそれだけでは不正確だ。枝の生えている角度と実際に飛んでいった角度には誤差が生じているはずだと、ちあらは考えた。

そこでさらに周囲の木々にも同じことを尋ねて回り、一致する方角が決まると、さらにその方角に数十mほど進んだ。

そしてそこでも同じように木々に魂の飛んでいった方角を尋ねる。

ちあらはそれを繰り返して、より正確な魂の飛んでいった方角をグーグルマップ上にプロットしていった。しかしどこまでも追跡できるわけではない。魂がある程度の高さに昇ってしまうと、木々も魂を知覚できなくなるので、そこで魂の方向は解らなくなった。

『面白いことを考えるものだな』

クマが少し感心して、ほくそ笑んだ。

「次の遺体の場所に連れて行って欲しい」

『ふむ、いいだろう』

こうして、六遺体から魂が飛んでいった方向を記録することができた。

ちあらは大きくうなずくと、満足そうにタブレットの画面を眺めた。

あとは家に帰ってからのお楽しみだ。

「ありがとう、あなたがいなければできなかったこと」

ちあらはクマに深々と頭を下げると、ぎゅっと、その分厚い手を握った。

* * *

それからちあらが目を覚ましたのは、すでに夕方だった。

自分の神社に戻ってきたのは、午前一〇時頃。朝六時の遺体収容が始まるまで、あの登山道の入り口で待ち、パトカーに塩山駅まで送ってもらい、浅草橋へと帰ってきたのだ。

ポロポロになった服や弁当の処理をして、お風呂呂に入って、寝た。

県から借りたタブレットは警察に返してしまったが、遺体場所とその魂が飛んでいった方向を記した

マップは、自分のメアドに共有しておいた。それを予備のスマートフォンで読み取り、コンビニでA3目一杯に印刷すると、これをコタツの上に広げた。

各遺体には数十〜数百m分ではあるが、魂が飛んでいった方向が記されている。この方向に定規を当て、さらにその先に線を引くのだ。

すると六遺体から伸びる、六本の線が交わる地点ができる。

これが、魂が向かった先であり、ちあらに残された唯一の手がかりだった。

そして六本の線が交わる地点は、とある山を指していた。

『雌鷄山……?』

それは雄鷄山とは国道四一一号を挟んで反対側に位置する山だった。方角としては南西、そして雄鷄山からは一五km離れているようだ。

山頂には神社まである。これはますます怪しい。

『あ……』

ちあらはさらにあることに気付いて、この雌鷄山から自分を監視していた目玉が消えた笹子駅までの直線距離を測った。

その距離、おおよそ二〇km。

『なるほど……』

雄鷄山の影響範囲は半径約二〇kmで、これはたぶん五里なのだろうとちあらは考えた。

つまり敵は雄鷄山ではなく、雌鷄山だったようだ。

そして雄鷄山と雌鷄山には何か関係があるのだろう。名前からして雄鷄おんどりと雌鷄めんどりだ、昔から謂れがあるのかもしれない。そして雌鷄山は雄鷄山を経由してさらにその先のことを見たり聞いたり力を行使したりすることができるのだろう。

雄鷄山や事故の多いあのカーブで何も探知できなかったのは、敵が雄鷄山からさらに一五kmも離れた別の山にいるからなのだ。

『ふむー…』

もっとも、この六本の線がクロスした地点が、本当に敵の本拠地かどうかの確証はない。もしかしたら囷かもしれない。が、ちあらにはここしか手がかりがないのも、事実だった。

「行く…」

ちあらは居間にかけてある時計を見上げた。

まだ一八時前だ。

「そして叩き潰す」

そして軽く拳を作ると、深く頷いた。

六、雌鷄山

「ほんとうにここでいいんだね？　ほんとうに、ほんとうだね？」

タクシー運転手の何度もの念押しに、ちあらは辟易しながらも、頷いた。

運転手は何度もちあらをジロジロ見る。

ぱっと見中学生ぐらいにしか見えない女の子が、山奥の誰もいない峠道で降ろせというのだから疑問に思うのは仕方がないことである。ただ、普通の女の子と違うのは、巫女装束を着ているということだ。しかしただのコスプレだと、他人は思うだろう。

となると、イベント会場でもないのに巫女姿とか頭沸いてるのかと思われる可能性もある。

「見て解る通りわたしは巫女で、仕事でここに来た」

「こんな夜更けに？」

「巫女の仕事はお祓い。そしてお化けは夜出る」

「……」

これほどもつともらしいのに説得力のない理由があるのか？

ちあらからしたら、降ろすのをためらうなら何故ここまで来たのか理解出来なかった。

止めるチャンスは途中にいくらでもあったはずだ。

一方運転手にしてみれば、この小さな女の子の心配もさることながら、万一この子が事件にでも巻き込まれたら、連れてきた運転手がやり玉に挙げられることを恐れていたのである。

「東京都総務局防災管理課で領収書を切つて欲しい。もし何かあったら都のせいになればいい」
 そう言つてお金を叩きつけるようにトレイに置くと、そこでようやく運転手は折れた。

タクシーを降りると、すかさず冷たい空気がちあらを襲つた。それもそのはず、この場所は標高一四五〇mもある。

街灯は遠くの方にぼつんと一つだけ。

ただ降ろしてもらつた地点には峠の茶屋があり、登山客用の広い大きな駐車場もあった。

この場所は柳沢峠やなぎさわとうげと言い、道路は国道四一一号線、通称青梅街道おうめいといつて、新宿を起点に東京の住宅街を東西に貫き、青梅、奥多摩おくたまを通過して塩山に至る。柳沢峠は東京側から塩山に向かう最後の峠で、ここから塩山まで一気に標高差一〇〇〇mの下り道が続くのである。

雌鷄山の登山口は峠の茶屋とは道路を挟んで反対側、山の斜面にそつて石階段が続いていた。

ここから山頂へは慣れた人だと二時間ちよつとらしい。

ちあらはいつもの図面ケースから打刀と脇差しを取り出すと、腰に差しなおした。

今回は巫女装束での登山だが、雌鷄山のような鎖場はない。

「うむ」

図面ケースを茂みに隠すと、一つ頷いて、真つ暗な登山道を歩き始めた。

ざわめく木々の音、どこからともなく聞こえてくる何かの動物の声。そんな中を早足に登っていく。ここでも山岸から教えてもらった登山のイロハが役に立つ。ペース、呼吸法、踏みしめるべき足場、登山道と獣道やただ草木がなくなつて道に見えてしまうようなところの見極め、などなど無意識に登つていてもいろんなことを判断しなければならぬ。

特に足の踏み場は重要だ。滑りやすい所、ぬかるんでいるところには極力足を乗せない。木の根つこや階段はコケの有無や滑り具合を見極める。これだけでも疲れはさずいふんと違うものだ。

ふと立ち止まって、山の斜面を見上げる。

雄鶏山、もとい雌鶏山はちあらを知覚しただろうか？

『まだだと思ふ……』

ちあらがタクシーを貸し切つて寺社回りをしていたとき、雌鶏山がちよっかいを出してきたのは日も暮れた後だった。ちあらの発見に時間がかかった証拠だ。

それに今は死者ハイド、ロマ、アンデッドに探知されない呪文を自分にかけている。ただ、この術はちあらが能動的に死者に対して何かしてしまうと解けてしまう。たとえば目の前に現れた怨霊を退散させてしまつたりとか。

さらに悪いことに雌鶏山は雄鶏山と打つて変わつて、魑魅魍魎の宝庫だった。

あらゆる霊や妖怪が飛び交い、山の中を闊歩かつぽしていた。

おそらく雄鶏山にいるツキノワグマのような、秩序を守ってくれる神がいからだろう。

ちあらの姿は死者には見えなくとも、残念ながら妖怪には見えてしまう。

「むう……」

首に巻き付こうと木の枝から滑り落ちてきた蛇の妖怪を振り払って、ちあらは口をとがらせた。

『人間だ』

『人間だ』

そうこうしているうちに、続々と魑魅魍魎が寄ってくる。

『こんな時間に人間がいるゾ』

『死体を運んできたのか？』

『なに、またか？』

『いや、一人だゾ』

『一人だ』

『おなごだ！』

『ぐひひ、女だ！』

「どいて」

ちあらはワラワラと集まってきた魑魅魍魎どもを押しよける。

『わしらが見えるらしいぞ』

『ナニ!?!』

『そんなバカな』

『いかん、隠れろ』

『今さら遅いわい』

『一体何者だ？』

『我らを退治しに来たのか？』

『お千代様に報告じゃ』

『いや、そんなことより我らの姿を見られた以上、殺^やるしかねえ』

『食っちまおうぜ』

『そ、それよりも、お、おらあこの子とまぐわいてえだ』

『オレもだ』

『順番だ、順番だ』

『処女か？』

『処女じゃなかったら、べべさ食い破ってやる』

『バカ、まぐわえなくなるでねーか！』

好き勝手な会話がちあらの周りで繰り広げられる。が、どの妖怪もちあらに触れようとはしない。ちあらの強さを探っているのだ。

『おまえが行けや』

『いや、まずは言い出しっぺのおまえが……』

『根性なし』

『おめえ、足ふるえてんぞ』

ちあらが一步踏み出すと、妖怪どもが一步下がる。

「む…」

試しにだだだどと何歩も進んでみると、妖怪どもは道を開けた。

なんだ口だけか。

遠巻きに取り囲む妖怪どもを見渡して、賢そうな顔をしていたイタチの妖怪をひっ捕まえる。

『ひっ!』

「お千代様って誰? 死体を運ぶってどういうこと?」

ちあらは先ほどの会話の中で気になったことを尋ねる。

『知らねえや』

しかしイタチは外方を向くだけだった。

他に答える気のある妖怪はないかと周囲を見渡すが、妖怪どもは好奇の目でちあらを見つめるばかり。

この山が、いや、この辺り一帯がこのような無法状態になっているのは、明らかにちあらが追っている雌鶏山のせいだろう。あの魔のカーブに地縛霊が滞留していたように。

となるとこの山は遭難や事故が多かったりするんだらうか?

「あなたたちに用はない、わたしが会いたいのはこの山の又シのみ」

ちあらは妖怪どもを無視して歩き出そうとすると、屈強な一つ目の妖怪が立ち上がった。

『そんなことより、自分の心配しな、小娘』

言うが早い、ちあらにつかみかかる。

しかし一つ目の大きな手はまるで滑るかのよう、あさつての方向に逸らされてしまう。巫女装束にかかっている防御魔法の影響だ。ちあら周囲には魔法障壁があつて、簡単に触れることはできない。

『こ、この……!!』

焦る一つ目。その隙を狙つてちあらは一つ目をこかすと、バランスを崩したところでそのまま斜面へと蹴り飛ばした

『うおおお……!?!』

叫び声を上げながら落ちていく。

そしてそれが引き金となった。

一斉に妖怪どもがちあらに襲いかかったのだ。

しかしちあらは逃げようとしめない。取り囲んでいた妖怪たちが、ちあらにつかみかかる、まさにその手や牙、触手などが到達しようとした瞬間、ちあら自身が爆発した。

大轟音と共に、約二〇四方が炎に包まれ、中にいた妖怪どもは吹き飛ばされてしまった。

炎の中から、ちあらがゆっくりと姿を現す。

その一部始終を見ていた他の妖怪どもは、ただただ唾然とするばかりだ。

燃やされた木々たちも黙ってしまった。

「刀を抜くまでもない」

ちあらはそう言うのと、自分の足許でもだえ苦しみながら転がる妖怪のヤケドを治してやった。

「抵抗するなら、排除する。死にたくなければ、去れ」

ちあらはそう言って、刀の柄に手をかけた。その手に炎のオーラが光る。

『こ、こいつ、バケモンだ』

『あの炎の中にいたのに無傷だぞ』

『怪火じゃ、怪火じゃ』

妖怪に化け物呼ばわりされるのは心外だが、自分が常識を逸脱した存在であることに間違いはない。

ちあらの周りにいた妖怪たちが、一斉にちあらから離れた。

そう、それでいいのだ、と思った瞬間！

ちあらの立っていた地面がえぐられるように崩れた。

「!!」

同時に地面から巨大な鎌が二本飛び出してきたかと思うと、ちあらを両側から挟むように迫ってくる。さらに地面はぼろぼろと崩れ、その中からその鎌の持ち主の姿が露わになった。巨大な昆虫の頭だった。

その頭から鋭い二本の鎌が生え、ちあらを真つ二つにしようとしていたのだ。

すごい、ここまで巨大な妖怪がそろっているなんて……妖怪保護地区にしてもいいくらい。

などと考えながらも、迫り来る鎌を尻目にちあらは打刀を抜いて、重力に任せてそのまま真下に突き立てた。

『ぎえええええ!!』

断末魔の叫びが、山の中に響き渡った。

「南無」

自分でブツ刺しておいて、南無もクソもないが、まあ南無いことに代わりはない。

鎌がちあらの身体を真つ二つにする前に、打刀が妖怪の眉間に深々と差し込まれていた。

同時に、ボンツと煙のようなものがあがると、巨大な鎌とそのヌシの姿は消え、小さなアリジゴクがちあらの足下でひっくり返っているのだった。

幻覚か？ それとも巨大化か？

なんにせよ、元の大きさは小指ほどもない。

ちあらは打刀を鞘に収めると、ぼかんと口を開けて驚いている妖怪どもを見渡し、「これ以上邪魔するなら、山ごと焼き払う」と言っ、自分の身体に炎をまとわせた。

『『参りました』』

ここでようやく妖怪どもはひれ伏して、ちあらに降伏した。

* * *

それから妖怪に案内されて、雌鷄山神社を詣でた。

しかし妖怪は山ほどいるものの、祭神はいなかった。

この神社は金山を奉ったもので、ここより北にある集落に里宮が鎮座しているらしい。

「金！」

なんか予想もしない単語が出てきた。

『雌鷄山ではその昔、金が採れたんじや』

『この神社は鉱山で命を落とした者なんかが奉られてたんでさあ』

「はえ〜」

ツキノワグマがこのエリアをテリトリーにしている理由が解った。金が掘れるが故に、あらゆる場所に人間が侵出し、ツキノワグマの手に負えなくなったのだろう。そして妖怪が棲む無法地帯となった。

『わしらの主の住処あるじすみかはこの神社じゃなくてこっちでさあ』

そう言っ、ちあらをさらに木々の生い茂る中に案内した。こんなところ歩けるわけないと思ったのだが、うっそうとしていたのはほんの十数メートルで、その先は明らかに斜面を削った平らな場所が現れ、両側には石垣が続いていた。何かを運び出すために整備された跡だ。

そして多くの霊や妖怪が行き来に使っていることも解った。

妖怪に誘われ^{いざな}るままに先を進んで行くと、大きな岩の前で妖怪たちは歩みを止めた。岩は草木で覆われ苔むしていたが、どこか隙間でもあるのか空気が抜けて来るのが解る。そしてその風に乗って霊が入りしているのが見えることから、この岩の向こうは空洞になっているのだろう。すると妖怪の一人が、金を掘る坑道の入り口だと教えてくれた。

『金鉱がバレないために、塞がれたんでさあ』

「なるほど」

この岩の向こうに、ずっと追ってきた雄鷄山……いや、雌鷄山の主^{ヌシ}がいる。

『お千代様、お千代様』

『お千代様に会いたいという人をお連れした』

『お千代様?』

妖怪どもが何度も大岩の向こうに声をかけるが返事がない。

ああ、やっぱりとちあらは心の中で舌打ちした。

妖怪どもを押しつけてこのまま中に押し入りたいが、巨大な岩が邪魔をしている。

「この岩をどかして」

『そ、それは……』

妖怪たちが顔を見合わせる。

「わたしがやると、あなたたちも、中にいる者たちもすべて吹き飛ばしてしまう」

ちあらはそう言つて、目の前の巨大岩をコンコンと叩いた。

『おれがやろう』

先ほどちあらに突き落とされた一つ目の大男が岩とがっぷり四つに組むと、岩を押し始めた。

『一人じゃむりだあ』

他の妖怪たちも加わつて、大岩を一生懸命押すがやはりびくともしない。まあでも人手はあるとちあらは思うと、蔦や倒木を集めさせた。

『どうするんで？』

「てい」

『『『』』』』

大岩の下を掘り、そこに倒木をガツチリとかませる。倒木は長ければ長いほど良い。さらに蔦でロープを作つて大岩に上の方を囲むように結び、それを妖怪どもに渡す。

「あなたたちはこの倒木を、こつちに思いっきり押して。同時に、この蔦をみんなて引つ張る」

『わかつただ』

『みんな、いくどー』

『『『』』』』

倒木が折れること三回、ようやく巨大な岩が動き、ちあらが通れるほどの隙間が空いた。

ちあらは急いで中に踏み込んだが……もぬけの殻。お千代はすでに雌鷄山から逃げた後だった。

『お千代様がなくなってしまうた』

『お千代様……!』

『お千代さまあ』

妖怪たちが坑道の中をさまよいながら、悲しげに名を呼んだ。

「……」

ちあらはしばらくその様子を眺めていたが、とりあえずこの場所が一体どういう場所なのかを妖怪どもに尋ねた。

この辺りには金が採れる山がいくつもあったこと。

たいそう賑わっていて、遊郭などもあり、黒川千軒と言われるほど栄えていたこと。

「それはいつのことなの?」

『戦国時代やね。甲斐武田家の所領じゃった』

「古……」

『この雌鶏山が黒川金山いうてな、北に龍喰金山、牛王院金山というのもあったんじや』

『けど武田家が滅ぼされるとき、金山の場所を隠すために塞がれたんでさ』

『そこで働いていた者たちもろともな』

「ひと……」

『おいらん淵いうて、谷底に落とされた者もおったんじや。あつちは供養塔が立つとる』

なるほどスマートフォンで検索すると出てくる。

おいらん淵に落とされた遊女たちの遺体は、谷底の川を下って、川下の集落に流れ着いたため、供養も行われたらしい。

『供養されるだけマシでさあ。この坑道に閉じ込められた者は誰にも知られずに死んじまっただ』

『敵が来るからこの中に隠れるように言われて、たくさんの遊女がここに入れられたんでさあ』

『入り口を大岩でふさがれたけども、最初は疑う者はおらんのだ』

『けど、待っても待ってもこの大岩がどくことはなかったんじゃ』

『女手だけじゃ、この岩はともじゃねえけど動かせねえ』

『自分たちは捨てられたんだと気付いた遊女たちは、暗闇の中で一人、また一人と狂っていったと聞いてまさあ』

『お千代様だけが最後まで狂うことなく、一人一人看取ったそうな』

『どうして狂わなかったの？』

『お千代様は盲目だったんでさあ。元から暗闇の世界に生きてたんでさあ』

『瞽女こせやね』

『瞽女なんて、今の人は解らん、解らん』

あわててスマートフォンで「ゴゼ」を検索する。琵琶法師の女版みたいなものらしい。

『でも狂わない方が地獄かもしれねえ』

狂い死にした遊女は、当然、怨霊となった。

その怨霊を鎮めるために、生き残ったお千代は一心不乱に三味線を弾いていたという。

弾いて、弾いて、弦が切れては張り直して、また弾いて……しかし、お千代自身も、その怨霊たちに飲み込まれ、ついに自らも怨霊となってしまった。それが、ちあらの追っていた雌鷄山の正体だった。

『お千代様はまだ幼くてな、客を取ることはできんかったし、目が見えんかったからもっぱら他の遊女のお世話をするのが役目じゃった』

『とくに三味線や琴で遊女たちの荒れた心を癒やしていたそうじゃ』

「そう……」

自分を鎖場から落としたとき、広場で恐怖の風が吹いたとき。確かに弦楽器の音を聞いた。あの音はお千代が弾いていたのか。

恐らくだが、琴や三味線の音が呪文の代わりを果たしているのだろうとちあらは推測した。

「あなたたちがそこまでお千代を慕うのは何故？」

『わしらが生き残る方法を考えてくれたのが、お千代様でさあ』

始め、妖怪どもはそれぞれ勝手に活動していたのだという。

旅人を襲って金品を奪っては、人を喰らう。文字通りの妖怪の所業だ。

『もともと江戸と甲斐を結ぶ街道は、この雌鷄山の南側にありましての』

『大菩薩峠だいぼさつとうげって言うだ。難所が多くてケガ人や遭難者が多かっただ』

『盗賊が住み着いたりして、そもそも、人の命に困ることはなかったもんでさ、ヒヒヒ』

だが、無秩序な妖怪どもの活動は人間たちの知られるところとなり、人間を積極的に襲った妖怪どもは退治され、霊は除霊されてしまった。

『はじめ、お千代様は黙っておらたちのやることを見てるだけだっただ』

『けれど、お千代様も怨霊。人の魂は、欲しい』

『そこでおれらに魂をとる掟を作ったんでさあ』

その掟とは、ターゲットを遭難や事故で死んだ者、すでに何者かによって殺された者、山に捨てられた者に限定することだった。そして山で殺人を犯した人間は、呪って良いとした。

妖怪による直接的な殺人がなくなると、山での妖怪や霊のうわさ話が消え始め、やがて時代が進むと共に人間は妖怪や霊を信じなくなり、さらに北側に立派な国道（青梅街道）が出来、大菩薩峠はただの登山道になった。

一見、無秩序に見えたお千代のテリトリーは、魂を奪うことに特化したエコシステムができてきたのだ。

「なんでお千代の言うことを聞いたの？」

『お千代様に従わなかったヤツはみんな人間に退治されちゃっただ』

『それにお千代様は、わしらのアイドルだあ。かわいいんだあ。お千代様のいうことなら、何でも聞いちゃうんだあ』

「あ、そう」

お千代がひたすら正体を隠し続けたのは、なにもちあらの力を恐れていたことではなく、彼女の処世術だったのだ。そしてこのお千代の戦略は、人とは距離をとるといふツキノワグマの戦略となんとなく似ていると思った。

さらに昭和の時代に入っても妖怪たちに味方したのが、ヤクザなどの反社だった

この一帯は自然林が残り、人が踏み入れない場所も多かったことから、暴力団の格好の死体遺棄現場となった。ついでに遺棄しに来た人間に呪いをかける。呪いにかかった者は巷で殺人を犯し、また死体を棄てに来る。時には前に棄てに来たヤツが死体として運ばれてくることもあった。

『だけど、それだけじゃあ魂は足りねえでさ』

妖怪が肩を落とした。

魂がそれなりに手に入る上に、人間に退治されなくなったため、妖怪が増えすぎたのだ。

ああ。

ちあらは、ポンと手を打った。

ちあらが依頼された事故の多い、あの魔のカーブ。地縛霊を配し、直接人間を狙う。これはお千代の掟から外れている。外れているから人間に疑われることになり、自分が派遣されることになった。

さらに、これはツキノワグマのエリアでも起きていることにも気付く。

それは「鹿」だ。人のテリトリーに入り込む鹿が増えたというあの大轟山三津窪神社での話だ。

人間のテリトリーに入ってしまった鹿は、獵友会によって駆除されてしまう。

「ふむー」

何事にも原因があり、結果があるのだなどちあらは一人で勝手に納得した。

「で、お千代はどこに逃げたの？」

『』……『』

妖怪たちは顔を見合わせる。

『お千代様は怨霊だから、岩があっても自由に出入りはできませんでしただ』

『けど、ここから出たことはほとんど無いでさあ』

『お千代様が心配だあ。どこかで迷子になってるかもしれないねえだ』

と妖怪たちが話していると、後ろで大きな岩が動く音が聞こえた。

『ああっ、岩が……!!』

『わはははは、小娘を閉じ込めたぞ』

『お千代様が戻ってくるまで、おまえは人質だ』

『お千代様がいなくなったのも、おまえのせいだ』

岩の向こうから、口々にそんな声が聞こえてくる。後先考えない妖怪らしい行動ではある。

『ばか、わしらも出られねえでねえか』

中に閉じ込められた妖怪たちが慌てて岩を叩いた。その脇をこれ見よがしに幽体が岩の隙間から出入

りするのが見える。

『おまえらは小娘の相手でもしてる。得意だろ』

『バカなこと言ってるねえで、早くこの岩をどけるんじゃ!』

「心配には及ばない、こんな岩どうとでもなる。あなたたちは無事では済まないけど」

『ひええ……』

そういえば吹き飛ばせるとか言ってたことを思い出し、震える。

『わ、わしらを巻き添えにするのは勘弁してください』

「外の妖怪たちを恨むべき」

『早よう開けい』

『こ、この方は、岩ごとわしらを吹き飛ばす気じゃ』

『やれるもんならやってみろ、見届けてやろうじゃねえか。どうせハツタリだ』

『い、いかん』

めんどうきいなあ。

妖怪どもものくだらないやりとりを他人事ひとごとのように眺めていると、同じように坑道ひとごの奥からじつとこちらを見つめている者がいるのに気付いた。それは自分と同じくらいの年頃の女の子。まさかお千代かと思っただが、着ている服がどう見ても現代だ。

その子はちあらと目が合うと、少し躊躇しながらもちあらの前に進み出て、興味深そうにちあらに触

れようとした。

「え」

しかしちあらを驚かせたのは、この子に魂があることだった。

「この子は誰？」

ちあらは言い合いをしている妖怪どもに割って入って、その子を妖怪たちの前に突き出した。

『ん？ 心音こころね言うだ。お千代様がかわいがってる靈たまでさあ』

魂は生きている人間に会えたことが嬉しいらしく、にこにこしてちあらに笑いかける。

「なんで、魂があるの？」

『お千代様の大切な友達だからでさあ。お千代様が連れてきたんでさあ』

『違うか、逆にこの子がお千代様を呼んだのかもしれないね』

『どうということ？』

『事故で死ぬはずだった子でさあ。助かったのに、この子が自分でこっちに來たんでさあ』

妖怪が少し悲しそうな表情かおをする。

「なるほど……」

ちあらは靈に向き直ると、その子の頭に触れて、記憶を垣間見る。

瞬時に靈の記憶がちあららの脳裏にフラッシュバックする。

事故の瞬間。

いや、その情報はいらぬ。

もう少し前……と思つたら、ガードレールをまたいで飛び降りる瞬間。

そつちじゃない。逆。

ばばばつとまるで走馬灯のように、彼女の記憶がいくつもちあらの脳に届いた。

「う……」

父親による性的虐待。

母親による暴力。

言葉によるなじりや理不尽な叱責、いじめ。

身体についた消えない痕は、見るたびに虐待の時のことを思い出し、さらに心を締め付ける。

痛む身体が、本当に痛いのか、錯覚なのかも解らなくなり、もだえ苦しむ。

しかし、霊となった今のこの子の身体には、そんな痕は一つもない。

『あの事故は魂をとるのに失敗したんでさあ』

『両親は助かったんじゃ』

このままでまた虐待の日々に戻ってしまう……と、魂がそう思ったのかどうかまでは解らない。もしかしたら彼女の目に、地縛霊たちの彼の世へ誘う姿が見えたのかもしれないし、お千代自身が手招きしたのかもしれない。

『よくお千代様は同じ年頃の魂を見つけたら、喰わずに大事にしておつただ』

「早逝そうせいしてしまつた魂と、自分の境遇を重ねたんだらうか？」

「ただ魂も永遠ではない。いつかは潰つぶえる。その時まで大事に抱えているつもりだったのかもしれない。」

「事情はよくわかつた」

「ちあらはこの山のことを理解すると、膝をポンと打つた。」

「でもどんな事情にせよ、わたしに発見された以上、この場所はもはや怨霊の棲める所ではなくなる」

『……』

「妖怪どもに動揺が走る。」

「ここは、完全に、人の地とする」

「ちあらは打刀を抜くと、妖怪たちの前でそれを地面に突き立てた。」

「ひいっと妖怪どもが恐れおののく。」

『わ、わしらは……？？ど、どうなるんじゃ？？』

「この地に、あなたたちと人間の神を置く」

「そう言つて、きよとんととしてゐる魂を呼び寄せ、自分の隣に立たせた。」

『お、お千代様は？？』

「ここに神を置く以上、お千代のことをあなたたちが気にかける必要はない」

「ちあらはその程度の表現にとどめた。お千代を滅すとはハッキリ言えなかつたのだ。」

「今のちあらにはそれしか方法がないことも、ハッキリ言えなかつた理由だつた。あの僧が言つていた」

魂を救うことは、ちあらにはできない。もしできるとしたら、お千代を石か何かに封じ込め、力ある仏僧に託すことだ。その者がお千代を地獄に送り、再び輪廻の輪にもどるまで試練を受ければ……あるいはまたいつか人間に転生できるかもしれない。

しかしお千代ほどの怨霊に打ち勝てる仏僧を、ちあらは知らなかった。

七、新秩序

ツキノワグマは木々が開けた草地にうつ伏せて寝そべり、心地よさそうに月の光を浴びていた。春を迎え、若草が萌ゆる中での月光浴はとても心地が良いものだ。様々な草花の香りと、そして様々な色。冬のモノトーンとは打って変わった景色だ。

少し強い風が草を揺らしながら山の斜面を滑り降りていく。どこかに山桜でも咲いていたのだろうか？桜の花びらが、風と一緒にになって斜面を舞う。

森は、山は、とても平和だ。

そしてこの平和は自分が作り出したという自負が、ツキノワグマにはあった。

長い時間をかけ、動植物たちがそれぞれ協力し合い、調和を保てるよう導いてきた。

平和を保つ秘訣は、人間と距離を置くことだ。

彼らは動植物の調和など受け入れない。彼らに関われれば、そこには必ず争いがある。

彼らが山や森を切り開いて侵出してきたならば、そこからは距離をとることが肝要なのだ。

人間がこの土地に現れてから、ツキノワグマはずっとそうしてきた。

しかし人間は遠慮なく自分たちの領域に踏み込んでくる。そう思いながら片目を開けて、自分の前で

琴の弦を張り直している少女を見つめた。

年の頃は一四く五歳ぐらいか。着ているのは古めかしいが紫を基調にした美しい振り袖のような着物で、同じく鮮やかな黄色の帯は前で結ぶようになっていいる。

少女は調律を済ますと、ぼーんと弦を一本強く弾いた。

風のせいだろうか？

夜の山に、よく響く。

それから、ゆっくりとした調子で弾き始める。

一弦一弦がしなやかに空気をゆらし、まるで桜の花びらに音がのるかのように、曲が流れていく。

その音楽の風に吹かれながら、ツキノワグマは再び目を閉じた。

心地よい。

人のすることではあるが……と、心で注釈を付ける。

平和な時間だ。

だが、ツキノワグマにとっては関わりたくない人間でもあった。

もっとも彼女は人間のなれの果て、ではあるが。

冬の間、ひとときも離れなかったこの少女を、ツキノワグマは少し持て余していた。

もちろん彼女はこの雄鶏山への出入りは自由だ。彼女は人間の怨霊の集合体であり、クマのテリトリ

ーとは関係がない。彼女が荒らすのは人間だけだからだ。

しかし、こうも常に一緒に居られると、さすがのツキノワグマもどうしたものかと考えあぐねているうちに、冬が過ぎ、春となってしまった。

なぜ少女は雌鷄山に戻らないのか？

それは一人の巫女によってあの山が浄化されてしまったからだ。

風が少し強くなった。山からのゴォツという吹き下ろしの音が、さらに草花をゆらし周囲の木々の枝を打ち鳴らす。

同時に、琴の音もまた鮮明となる。

一瞬、風下から風の音とは異なる草の揺れる音が聞こえた……ような気がした。

風のままに葉々がこすれる音ではなく、かき分けるような音。

音は風の流れと共に伝播する。風上へは音は空に昇ってしまうので、よくわからなかった。

ああ、また聞こえた。でもまさかここに人はいまい。今は琴の音に、耳を傾けていたい。

と少女の方に向き直ろうとした瞬間、何かが草むらの中から飛び出してきたかと思うと、それは寝そべるツキノワグマを飛び越え、その前で演奏していた少女に向かって行った。

同時に琴の音が乱れ不協和音が響く。しかし、それは一瞬だった。

目を開けると、風と共に舞う桜の花びらがツキノワグマを包み込む。

その流れゆく花の向こうで……少女の身体が崩れていくのが見えた。

二度と鳴らない琴の音の代わりに、カチンという金属音。

刀が鞘に収められた音だった。

顔を上げると、倒れた少女の向こうに、一人の巫女の背中が見えた。

そしてその手前には、少女の首が転がっている。

『ずいぶんと、遅かったな……』

すこし悲しい目をしながら、ツキノワグマはゆっくりと起きあがった。

「いろいろな忙しかった」

巫女がその首を拾い上げると、瞬く間に青い炎に包まれ、灰となってしまった。

巫女が広げた腕から、吹き下ろしの風に乗って、舞っていく。

サクラの花びらに混じって……。

高く、遠く……。

いつしか胴体も、灰となって舞って行ってしまった。

「どうせ、ここにしか逃げ場はないと解っていたから……別に急ぐことはなかった」

『そうか……』

ツキノワグマもまた空を見上げ、吸い込まれるように消えていく灰を目で追った。

『少し、残念だ』

そして、ぼつりとそうつぶやく。

「どうして？」

『あの怨霊は、おまえたち人間が我々のテリトリーを奪う速度を、ほんの少しだけ遅らせてくれる存在だったからだ』

「あー」

人間たちは霊や怨霊をすでに信じなくなったが、それでも不幸や不可解なことが連続すると、その中に意味を見いだそうとする。それが神や霊の仕業だと思わなかったとしても、運命とか縁とかそんな言葉で納得しようとする。

曰く付きなんて言葉も、そうだ。

だからそんな場所は少しの時間、手をつけられずに放置されたりする。

それがツキノワグマにとって、そして動植物たちにとって、希望だったりするのだろう。

『おまえたち人間は、必要以上に残虐すぎる』

ツキノワグマは空を見上げたまま、ため息をついた。

『だがその残虐性のおかげでおまえたち人間は、この地上にあまねく広まり繁栄できたことは理解しているつもりだ。他を押しつけてな』

「そうかも……?」

『おまえたちの殺戮はこれからも続く。だが、私は悲観していないし、おまえたちの残虐性を受け入れ
ている』

「なぜ?」

『理由は二つある』

ツキノワグマは巫女に向き直ると、爪を二本むき出しにした。

『一つはどんな種にせよ繁栄は永遠には続かないからだ。この地上を支配した種は過去にいくつもあつたが、どれも次なる種に淘汰された。おまえたちが繁栄する時代も、いつかは終わると信じている』

「二つ目は？」

『おまえたちの残虐性は、おまえたち人間自身にも向けられている』

「う……」

『人間が人間を滅ぼしているのだ。残虐性を持って他を押しつける時代は疾うに終わっているというのにな』

ツキノワグマはそう言って笑うと両腕を広げ、月明かりに照らされる山々を見渡した。

調和の取れた彼のテリトリーを見ろ、と言いたいのだろう。彼のテリトリーの中で調和を乱す者は、人間だけだ。

『さあ去れ。ここには二度と入ってくるな。おまえにならその言葉が通じることを信じている』

ツキノワグマは強い口調でそう言うのと、登山道のある方角を指し示す。

巫女は深くお辞儀をすると、黙ってクマの指す方角へと消えていった。

* * *

春のうららかな心地よい日差しの中で、ちあらは手を合わせていた。

彼女の目の前には「布施家之墓」と彫られた墓石があった。あの山岸に殺された山登りが趣味の県職員
の墓だ。ほんのりと線香の香りが漂う。

ちあらの隣には、もう一人の県職員もまた手を合わせていた。

結局のところ、蘇生は一人もできなかった。雌鷄山の怨霊お千代は奪った魂をすべて妖怪たちに与えてしまっていたからだ。魂がなければ、どんな魔術や秘術があろうともどうすることもできない。

「布施さんと山岸さん、天国で和解するといいいな」

県職員がふとそんなことをつぶやいた。

もちろん二人は魂ごと亡くなってしまったため、天国はおろか地獄にすら行けてはいないのだが、そんなことは言っても始まらないことだ。残された者が自由に思いを馳せればそれでよい。それに、二人が天国にいることは、ちあらも同意したい気持ちだった。

「あ、オレ、四月からまた山で働き出したんだ」

県職員は少し照れ笑いを浮かべながら、名刺を差し出した。

あの事件で精神的に参ったらしく、職を辞したのは聞いていたが、山での仕事を諦められず、林業の会社に再就職したのだという。

「あの時のことはトラウマでしかないんだけど、誰でも経験できることでもない。山の本当の姿を見た

ような気がしたんだ。それを知っているオレが山で働くって意味があるよなって……」

彼は登山などのアウトドアが趣味ではなかったが、山や林業に何らかの思いはあったらしい。県土整備課にいたのも、ただの偶然ではないようだ。

「かつては人も知覚していたこと」

「ああ、なんとなく解るよ」

山や動植物の中に、人間も含まれていて、人間は彼らと生活を共にしていた。

「けれど、今は知覚しなくても済むようになった」

しかし今はそれらとの共生は気にする必要がない。

「確かに」

「わたしはそれを、科学、と呼んでいる」

「それはまたどうしてだ？」

「科学は誰がやっても同じ結果が出せるようになっていて、神や霊がはさまる余地はない」

「ちょっとよくわからないな……」

「火をつければ燃える、水は重力にまかせて低い方に流れる。様々な法則を見つけ、その通りにすれば、その通りの結果になる。法則さえ解れば誰でも使えるのが科学で、神とか霊とかの意思は無視できる」

「なるほどね」

「だから」

「だから？」

「無視しすぎるとほころびが出る。例えば自然災害を招いたり、温暖化を招いたり」

「面白いなあ」

「もしあなたが山で科学的に不可解なことに出会ったら……この事件のことが役に立つと思う」

「ああ、そうだな」

県職員は嬉しそうに笑った。

「それにさ、科学も変わるさ」

そして大きく頷く。

「科学も自然と共存することを考え始めてる。未来は暗いことだけじゃないさ。そのためにオレはまた山に戻ってきたんだ」

県職員はそう言うのと、満足そうに振り返って空を見上げた。その視線の向こうに、遠く山梨の山々があつた。

* * *

午前中の墓参りを終えると県職員と別れ、ちあらは雌鷄山に向かった。

今度はタクシーの運転手と揉めることもなく、柳沢峠で下車する。

雌鷄山はこの山全体を浄化するために何度か訪れているため、今や勝手知ったる他人の家状態だ。一時間ほどで山頂近くの神社まで登れるようになった。山岸にレクチャーされた登山のイロハはちあらの中で生きているのだ。

神社に続く石段を登っていくと、真新しい灯籠とうろうと記念塔が奉納されていた。

事前に発注して、設置してもらったものだ。けっこうなお金がかかった。

記念塔はお千代を始め、あの坑道で生き埋めになった遊女たちを供養するものだ。

灯籠はこの山の新しい神を迎えるために奉納したものだ。

坑道は山梨県の教育委員会に報告され、今は考古学的な調査が行われている。武田の隠し金山の歴史に新たなページが刻まれることだろう。

ちあらは拝殿の前で手を合わせ、軽く祈った後、袖元から持ってきた石ころを取り出した。

「今日からあなたはこの神社の祭神になる」

そう言って、石に閉じ込めていた魂を神社に解き放った。坑道で見つけた、あの魂だ。

依代よりしろとしてUFOキャッチャーでとってきたかわいらしい男の子の人形を本殿に置く。この人形も魂

と相談してとってきたものだ。なんでもこの魂が好きなアニメのキャラクターなのだそう。とるのに三

〇〇〇円もかかってしまった。

お千代のテリトリーは今日からこの魂が引き継ぐことになった。お千代との違いは、怨霊ではなく神であることだ。とはいえ、今はまだ魂ある霊に過ぎない。神としての資質はこの子の成長にかかってい

る。神として成長すれば、自分自身や妖怪たちが必要とする糧かてを魂から得る必要はなくなる。

もっともそれまでは妖怪たちにはひもじい思いをさせることになるが……。

また登山者がこの神社を詣でることも重要だ。一時的な信心でも神の力となし、お供え物も力となる。

魂はしばらくもじもじとしていたが、なんとなく状況を把握すると、依代の人形をぎゅーっと抱いて笑った。

「気負う必要はないから。ただ、登山者と妖怪たちを見守って欲しい」

その言葉に、魂は深く頷いた。

「最初は心細いと思うけど、この山にはたくさん動物たちが住んでいるし、妖怪たちもあなたを新しい主として迎えてくれる。困ったことがあったらわたしに相談してもいいし……」

そこで言葉を切って、北西を向いて、雄鷄山のある方角を指さした。

「ツキノワグマに相談してもいい」

この山の北側を通る青梅街道を隔てた向こうは、あのツキノワグマのテリトリーだ。

「大丈夫、彼は今は人間を疎とんでいるけれど、人間が動植物たちと調和して欲しいと願っていることは間違いない。あなたがその架け橋になってほしい」

人間が山の調和に参加するなら、ツキノワグマは拒まないはずだ。

「え？ わたしと相談したいときは？」

魂が不安そうにちあらの周りを回る。するとちあらは得意そうな笑みを浮かべて、何か呪文ブランク・ドアを唱えた。

すると一瞬でちあらの姿が消えてしまった。

取り残された魂はオロオロ。ふらふらと周囲を探し回ったが、次の瞬間、再びちあらの姿が現れた。手には大きいよかんが二つ。浅草橋の自分の神社にあったものだ。それを得意げに拝殿にお供えする。「この神社は私の神社とつながっている。だから心配はいらない」

雌鶏山神社のご神木とちあらの神社のご神木が結ばれ、雌鶏山神社は分社となったのである。

魂は驚きのあまり目をぱちくりさせたが、安心すると、今度はいよかんの周りをぐるぐると回った。「うむ、一緒に食べよう」

ちあらはいよかんの一つをとって、皮をむき始めた。

が、途中で肉体のない魂はどうやって食うんだと思う。

そんなちあらの疑問もつゆ知らず、魂は期待の眼差しをちあらに送っている。

あー、なんかアストラルがどーのこーの、アウトプレンがどーのこーの。

いやいや、そんな小難しいことはない。

魂が抱いているこの依り代の人形のように、清めて、魂でも触れられるようにすればよいのである。もつともそれを食い物に対してやったことはないのだが……と思いつつやってみると、食べるらしい。

「よかった」

おそらく世界初のマジックアイテムならぬマジックいよかん誕生の瞬間であった。

甘くも少しの酸味が口の中に広がる。

山の上で食べるのは、なかなか心地よいものだと思つた。今度はお弁当を作つてこようとも思う。もうここには一瞬で来られるようになったのだから。

「そうだ、好きな食べ物はない？ 今度、お弁当を一緒に食べよう」

その言葉に魂は瞳をキラキラさせる。

それからいつの間にか話題は学校の話になり、推しメンの話になり、好きな人の話になり……そこに
あるのは太陽をも統べる希代の巫女と怨霊にとらわれていた魂の殺伐とした会話はなく、ただの女子の
他愛もない会話となつていた。

でもそれで良いのだ。この魂に残酷性は必要ない。彼女は生前、同じ人間に虐げられてきたのだから、
今は新しい世界を謳歌してほしいとちあらは願つた。

いつかツキノワグマも呼んで一緒に語り合える未来を夢見ながら……。

二人の時間は、夜が更けるまで続いた。

了



青いエリア：ツキノワグマのテリトリー
赤いエリア：お千代のテリトリー

雄鷲山

大場 (雄鷲山登山口)

大森山三峰登山社

国道411号養老街道

雄鷲山

柳沢村

中山駅